
キャラバン無頼

ゴメス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キャラバン無頼

【Nコード】

N5080R

【作者名】

ゴメス

【あらすじ】

西暦まもない中国西域。僅か4人のいわくありげな隊商が古代シルクロードの要所・敦煌に帰ってみると、そこには圧政を敷く儒者あがりの太守がいたのだった。という激突必至の王道懲悪エセ歴史ファンタジー。

プロローグ（前書き）

初投稿です。苦心惨憺の末、歴史的事実を引用しながら大筋では嘘をついているという少々タチの悪いものになってしまいました。何だかそれっぽいファンタジーとしてお読みいただければ幸いです。厳しさのなかに厳しさの垣間見えるご感想をお待ちしております。

プロローグ

砂漠に月が出ていた。

寒い。

旅人は男が三人、女が一人。

それぞれ駱駝に揺られている。

「なあ大将、まだつかへんの？」

大将　と呼びかけられた若い男は、星のまたたく夜空を見上げながら、

「そうですね、あと二日つてところでしょうか」

「かかりすぎや。今夜中には着かれへんのかいな」

「頑張つて距離を稼げば、明日の夜半には　着きますかね？」

「なんで疑問形やねん」

大柄な男は、切なげに嘆息した。

無尽蔵のスタミナは長旅を苦しめないが、そのぶん単調に感じるようだ。

「まあまあ將軍どの、さほどにお急ぎになることもございませんでしょう」

そう慰めたのは、背の高い男だった。

すらりとした長身も軽やかに、すまし顔でゆったり駱駝に揺られているが、あご先で揺らす羽根付きの扇子が、あまりにも場違いだった。

「せやけど、先生」

「いま少しの辛抱で、砂漠の都と言われる、あの有名な敦煌でございますから」

ぱつと扇子を開いた長身の先生は声も高らかに、

「敦煌　　そう、オアシスが育んだ東西文明の交差点、砂上の真珠と謳われる商人の聖地」
「商人の聖地い？」

駱駝の背で居眠りをしかけていた女が、ぱつと顔を輝かせて、

「いっぱい人がいるのかな？」

「おりますとも。人口およそ三万八千。少ないようですが、西域では有数の大都市に数えられます。かつての帝都百万とは較べるべくもありませんが、人口の大半が交易商となれば」

「そりや楽しみだね。稼ぐぞ、稼ぐぞオ！」

とは、駱駝に背負わせた荷を、売り捌くつもりなのだろう。

「でも姫さま、聖地の商人はそんなに甘くないかもしれせんよ」

釘をさしたのは、星空から視線をおろした大将だった。

「何よ、むしろ腕がなるつてもんじゃない」

「いや、何事も最初は謙虚に慎重に、ですから」

「びびったら負けよ。だいたい大将あんだ、いっつも腰が引けてんのよ」

「いえ、ただ僕は」

「しゃきつとしなさいよ、男でしょー！」

「まあまあ、姫さま」

先生 が助け舟を出した。

「そのお話は、敦煌に着いてからでも、遅くないのではございませんか」

それはそつだ。

西の最果てとはいえ、彼らにとっては、ほぼ十年ぶりの漢文化圏である。

漢帝国 建国の祖・劉邦が廟を開いて二百余年。

ついに奸臣・王莽によって帝位を篡奪されたが、これを奪い返した光武帝により、からくも皇統は引き継がれていた。

時に西暦二五年。

相次ぐ内乱で国力は疲弊し、後世に劉家の漢か、李家の唐かと讃えられた、大帝国の面影はすでない。

しかし、それでも大陸の東に君臨する強国であることに違いはなかった。

その威風は砂漠を越え、インドのバラモンや中東のパーティア帝国、その先にいるキリストの弟子たち、そして帝政に移行したローマにまで聞こえたという。

だがそんなことは、砂漠をゆく 姫 には関係なかった。

(あんだ、おぼえてなさいよ)

威嚇をこめた視線を感じて 大将 は首をすくめた。

「せや、まずは無事に着くことや。聖地は逃げへんて」

話の口火は誰だったか 将軍 は忘れていたようだが、とりあえずそれで手打ちとなった。
月はまだ高い。
駱駝は黙々と、冷たい砂を踏みしめていた。

一 篡奪者の野望が成就し、やがて潰えること

官につくなら執金吾、妻をめとらば陰麗華。

後漢の創始者、光武帝こと劉秀の言葉である。

ちにみに執金吾とは、前漢の首都・長安の警視總監のような役職で、いっぽう地方貴族の娘である陰麗華は、都でも噂を聞く評判の美人だったという。

つまるところ、

「出世して、かわいい嫁サンを貰いたいなあ」

という程度の野望でしかない。

そんな他愛もない夢を見ていた若者が、一度は滅んだ王朝を復興して、天下万民に君臨してしまったのだから面白い。

では、前漢を滅ぼしたほうは、どんな人物だったのか。

その男は名前を王莽という。

在りし日の漢では、大司馬という政界トップの地位にあったのだが、その正体は世渡りがうまいだけの佞臣だった。

もつともただ世渡りがうまいだけでは、衰退期とはいえひとつの王朝を滅ぼすような、大それたことはできない。

王莽が他の小悪党と違ったのは、こ狡く出世するたびに肥大化していく欲望と、それを当然と思い込める性格にあった。

（ままだ。ままだ、こんな地位では足りん。こんなものではないぞ、わしは）

びくびくしては、歴史を動かす悪党になれないのだ。その欲望のいきつくところが、皇帝の弑逆である。ここに至って、肥大化した欲望もひとつの極みに達している。すなわち、

皇位の篡奪。

みずから皇帝となることにほかならない。前漢十三代の皇帝、平帝はこうして殺された。

「よしよし。では、いよいよ」

と、いきなり飛びつくほど、王莽も甘くない。

なにしろ二百年続いた王朝を乗っ取るのだ。

それなりの理由がなくては、誰も納得しないだろう。

なにしろ皇族だけでも、数千という数がある。

彼らをさしおく根拠なくして、天下の主たる正統性はもてないのだ。

このあたりの感覚は、さすが世渡り名人だけあって鋭い。血統や軍事力を背景としないぶん、じわじわと慎重にことを運んでいった。

(まだまだ。まだ早い・・・)

まず下準備として、版図のあちこちで瑞兆を報告させた。瑞兆とは、めでたいことが起こる前の「きざし」「だと言っ。

「奇石が発見されました！」

「珍獣が捕獲されました！」

といった珍事を、全土に頻発させたのである。

世の中に大きな変化が訪れるさい、天はそうした珍事を起こして人々に知らせるとういう。

それを自分で演出したわけだ。

下準備は下準備として、まだ漢の王朝は続いている。

殺してしまった平帝のかわりに、当面、誰かを帝位につけなければならぬ。

といってへたな人物に継がせようものなら、

(ワシの首が危ない)

皇帝の外戚 生母である皇太后や、正妻である皇后などの縁戚筋が、朝廷の主要ポストを独占することが、この時代よくあったのである。

ほかでもない王莽自身が、第十代元帝の皇后 当時まだ存命していた太皇太后 王政君の甥にあたった。

縁故を振り出しに出世していった王莽には、大いに辣腕を発揮して、登場する政敵を次々と排除していった過去がある。

この物騒な時代の政敵排除とはつまり、

一族みなごろし 。

ライバルとともに、復讐の芽も摘むのだ。

平帝の外戚である衛一族は、こうして根絶やしにされた。

酷いことをしてきただけに、人選には慎重にならざるをえなかった。

傀儡とはいえ帝位についてしまえば、いつ奸臣肅正の勅令を出さ

ないとも限らない。

いまや楯突く者など誰もいない王莽だが、一方で多くの恨みを買っていることも自覚している。

疑い出せば、

(あいつもワシを恨んでいる。こいつもワシを憎んでいる)

まさしくキリがない。

もちろん皇帝の周囲には、幾重にも網を張り巡らしてガードするつもりだが、万が一かいくぐって皇帝に耳打ちする者が現れれば、一族みなごろしの憂き目にあつのは、自分の番になってしまう。

「誰かいないか。親戚がおらず、暗愚な皇族は」

皇帝の選定条件としては、おかしなものといわねばならない。ともあれ難問に直面した王莽は、ぶつぶつ呟きながら自邸をうろつきまわったという。

そして悩みに悩んだ末、ぽんと手を叩いたのである。

「そうか。いないなら」

王莽はそこで口をつぐんだ。

家人すら信用しないこの男は、その思いつきを口に出すこともできななのだ。

(そうだ。そうとも。いないなら)

王莽は心の中で、何度もその言葉を繰り返したという。

やがて。

王莽の野望は成就し、そして潰えることになる。

史書に記す多くの事件と、彼の「思いつき」に運命を狂わされた人々、やがて消えゆく巷間の伝承を遺して。

二 迷惑な客が帰り、またやって来ること

「婉ちゃん、ねえ媛ちゃんてばさあ」

山羊のような顎髭をさすりながら、男が娘の気をひこうとしていた。

敦煌にある小さな旅籠である。

他の多くがそうであるように、ここも一階は食堂を兼ねた居酒屋となっていた。

もっとも、宿のほうはこのところ客足が途絶え、部屋はすべて空いている。

居酒屋のほうには地元の連中がやって来るが、本業のほうが振るわなければ、やりくり苦しいのが現実だった。

「おおい、媛ちゃんてばさあ。こっち向いてよ、我輩にも酒をついでおくれよ」

さほど酔っているようにも見えないが、山羊髭はしつこかった。

しかし媛と呼ばれた娘はとりあわず、ただ注文された黙々と酒を運んでいる。

他の客は時折、顔を見合わせながら、それでも黙って酒を飲んでいた。

このところ、彼らの横暴は目に余るが、どだい文句を言える相手でもないのだ。

「おおい、媛ちゃんてば」

山羊髭の男は名を陳俊という。

敦煌太守・曹延が雇った武人だが、かつては中原でならした將軍というふれこみが、どこまで信用できるか知れたものではない。

ただその態度は横柄、尊大、傍若無人で、少なくとも自意識は並み以上のものがあるようだ。

「おおいつてばさあ」

陳俊は子分を連れていた。

ゴロツキに毛の生えたような連中だが、いでただけは立派に構えている。

その子分衆が親分の報われぬ様子を見て、ついに怒りはじめた。

「こら小娘よう。このお方が、どこの誰かわからねえなんて言わねえだろうな？」

どうにも柄がよくない。

「いいか、よく聞けよ。このお方はな、かつて光武帝陛下のもとで將軍をやっていたらしい陳俊サンだぜ。本当ならよ、お前らが、おいそれとお目にかかれるお方じゃねえんだよ」

こうして大声で弱者を威嚇するのが愉快で堪らない　その程度、いわゆる小者だった。

「確かに一時はよ、盗賊なんかに身をやつしてたけどよ。おまけに今じゃこんな辺ぴな田舎領主に雇われちゃいるけどよ」

「馬鹿野郎！余計なことを言うなっつ」

ガッン！

と、子分の脳天に拳骨が落ちた。

「痛た」

「俺は、べつに身をやつしてなんかねえだろ！」

「いや、でもお頭ア」

「お頭と呼ぶなど、何度言やわかるんだ！いいか、今の俺は交易都市・敦煌の衛尉（警護長官）である。よって、我が使命は太守曹延どのと、民のつつがなき暮らしを護るにある」

陳俊は誇らしげに胸を張った。

ところが、それを聞いた媛の顔色がかわった。

「民を護る？」

黙ってた客たちが、

（まずい）

と身を固くする。

「どごが護ってるんですか！」

媛は、はじめて正面から陳俊と向き合った。

日頃は若い娘と思えないほど落ち着いている彼女だが、この件になると我を忘れてしまうのだ。

（無理もないけどさ　　まずいぜ）

自分のそれが危ういかのように、客たちは首をすくめた。

現に、頭の悪そうな陳俊の子分は、早くも剣の柄に手がかかって
いる。

そんな剣呑な雰囲気など気にもせず、

「傷ついちゃうなあ。吾輩だってほら、頑張ってるじゃない。ねえ、そんなに怒るなよ媛ちゃんではさ」

「あなたが頑張ってるかどうかなんて、知りません。でも、誰も護ってなんかいないじゃないですか。罪のない人をたくさん捕まえて、牢屋に入れて、結局帰ってこない人ばかり　うちのお父さんだつて」

媛の父親は商人だつた。

それも西域の楼蘭、フェルガナ大宛、果ては康国にまで足を伸ばした交易商である。

そんな男が、旅籠の娘を妻にして、しかもそのあるじにおさまってしまったのだから、周囲はずいぶん驚いた。

やがて、娘がひとり生まれた。それが媛である。

難産で肥立ちも悪く、ほどなくして母親はこの世を去つた。

その後、媛の父親は小さな旅籠の主人として、ひとり娘を育てたのである。

温厚だが気骨があり、人望も厚く、いつしか土地の顔役のような存在にもなっていた。

その父親が敦煌太守・曹延に捕らえられたのは、半年前のことだつた。

「そりゃまあ、あいつが悪いんだよ」

悪びれもせず陳俊が言った。

この男には、心の機微が欠落しているらしい。

「曹延どのが太守なんだ。偉いひとに逆らっちゃいけないよ。なのにあいつ、直訴だか直談判だか知らねえけど、余計なことするもん

だからさ」

「交易を禁じられた商人が、どうやって生きていくんですか」

声に嗚咽が混じりはじめている。

思わぬ剣幕にたじろく陳俊だが、

「難しいことはわかんねえけど　まあ、どうやって生きてくも
何も、死んじまったからなあ、あのおっさん」

やはりこの男、人格に大きな欠陥があった。

とうとう媛は顔を覆い、店の奥へ走りこんでしまった。

「ありゃ、泣かしちまったか」

さすがにバツが悪いのか、陳俊は山羊髭をさすりながら、

「なあお前ら、俺が直に殺ったんじゃないやねえって言うといてくれよ。
捕まえたのは俺だけだよ、取り調べたのは俺じゃねえんだから、さ。
じゃ、また出直すわ」

周囲にそう言い残して、そそくさと店を出て行った。

「勘定はツケとけよ。わかったな？」

子分衆もそろそろと席を立つ。

彼らがどやどや出て行くと、後には気まずい沈黙だけが残った。

客たちはしばらく互いに顔を見合わせていたが、やがて何人かが
様子を見に立ち上がった。

「おい、大丈夫か　？」

厨房の奥で、小さな背中が震えていた。ひとり厨房を任されている料理人が、心配そうに手を揉んでいる。感情を沈めていたのだろう。しばらくして振り向いたときには、気丈にも笑顔をみせていた。

「ごめんなさい、もう大丈夫です」

「こっちこそすまねえな」

客のひとりが悔しそうに顔を歪めた。

「俺たちにもつと力があれば、あんなよそ者にでかい顔させねえのによ。そのうち俺達だって　」

「駄目よ。無理をなさらないで、皆さん」

「いや、でもよ」

「わたしのことは気にしないで。それより、滅多なことを言っている人たちに睨まれたら大変ですから」

促されて、客はそれぞれ席に戻った。

だが会話もとぼしく、無理して媛が話題を振っても、すぐに会話が途切れてしまう。

といて席を立つでもなく、重苦しい雰囲気のまま、夜半まで酒を煽る　それが、近頃の常だった。

だが　今夜は違っていた。

「おう、飯や！ 違た、酒や！ いや、どっちもや！」

ほとんど喚き散らすような大男を先頭に、実に騒々しい一団がなだれ込んできたのだった。

三 嵐が来て、やがて静まりかえること

小さな店は、嵐に見舞われた。

子羊の香草焼き。

茄子と玉葱の辛煮。

雉肉と胡麻の葉を刻んだ和え物。

瓜と挽き肉の炒めもの。

香草と駱駝の肩肉煮込み。

とき卵をかけまわした五穀雑炊。

餡掛け肉団子。

干し肉とキヤベツの酢漬け。

西瓜。 ナツメ。 杏。 干し葡萄。 等々

彼等は凄まじい勢いで、出される料理を吸い込んでいた。

しかもたったの四人、うちひとりとは若い女である。

さらに、まだ到着から判刻とたっていない。

それでいながら彼等は、片時も会話をやめようとしなかった。

口を開くときには、いつも喋るのと料理をほうり込むのを兼ねている。

その声はまだ、途方もなく大きい。

ひとときわ大柄な男が、訛りのある声を銅鑼のように響かせると、負けじと女がよく通る声を張り上げる。

背の高い優男もからからと羽根つきの扇子を振り、呑気そうな若い男も酒が入るとすっかり廻って、意味不明の奇声をあげはじめた。

酒といえば、呑む量もまた尋常なものではない。

葡萄酒の醸造酒、糯米や麦の蒸留酒、さらにはそこにナツメ等を漬

け込んだ果実酒、果ては料理酒や味醂まで何でもかんでも煽つてしまふ。

ただでさえ騒々しいのに、酔うとそれが数倍になるのだった。

もちろん媛と、ひとりしかいない料理人は、とてつもなく忙しい料理に酒にと、用意する側からなくなってしまうので、小さな店を休みなく駆け回らなければならなかった。

何しろ彼らは食べ物か酒、どちらが切れても箸で食器を叩き出すのだ。

「おおい、酒が切れてんで。何でもええわ。早う持つてきてや」

「ちつとは我慢でもんを覚えなさいよ。すいませーん、このお肉に小さいお豆の入った炒め物、もうありませんかあ？」

「その豆は豆鼓という、コクと香りを豊かにする発酵食品でございます。最近、発明されたと聞きましたが、なるほど食材の旨味をよく引き出して、実に興味深いものですな。ところで、まだ白酒はございますでしょうか」

「アチヨー！」

ひとりを除いて、文字通り引つ切りなしにオーダーしてくる。

目がまわる忙しさで、そのうち食材や酒も切れ、何度も近隣に借りて走らねばならないほどだった。

だが。

「ふふ」

媛の口元には、微かな笑みすら浮かんでいた。

額ににじむ汗すら拭うのを忘れている。

これほど忙しく立ち回ったことなど、一体いつ以来だろうか。

傍若無人は先ほどの陳俊と同じかそれ以上なのに、不思議と腹が

立たない。

何故だろっ？と考えるすぐ、

(そっか)

どれもこれも、実にいい笑顔なのだった。

他の客も迷惑というよりただ呆れ むしろ楽しんでユーモラスな珍客を見物している。

「なんやこれ。旨いやんけ。白いやんけ。四角いやんけ」

「それは豆腐でございましょう。淮南王・劉安が考案したといいますから、一五〇年前には発明されてございます」

「そない昔からあるんか。煮てよし、焼いてよし、そのままでもええ おそろしいもんやな。知らんかったわ」

「筋肉ばっかつけてるから、脳味噌がお留守なのよ」

「なんやコラ、鼻に薪つつこんで力チ力チいわしたるか」

「それケツからつつこんで口から出るまで蹴りあげるわよ」

「ヒーハー！」

やがて、奇声をあげる若い男が、酔い潰れてひっくり返った。

巨漢は他の客と腕相撲をはじめ、優男が扇子をひらつかせて見物している。

「い」馳走さま」

媛が食後酒をつぎにいくと、若い女が礼を言った。

「お口にありましたでしょうか」

「こいつら見てわからないかな？ははは」

つられて媛も笑ってしまふ。

「あたしね、麗華っていうの。よろしく！」

互いに自己紹介をして、自然と話が弾み出した。

ふたりの年齢はそう違わないようだ。

同世代と笑い合うなど、それこそ何年ぶりかわからない。

「ごめんね、やかましくて。こいつら作法ってもんを知らないんだから」

媛は曖昧に笑うにとどめた。

「久しぶりに、楽しくおもてなしてきました」

「料理人のおじさんも、いい腕してるね。美味しかった」

「ありがとうございます。あの、どちらからいらしたんですか」

「西よ。ずいぶんあちこちまわって、久々に戻ってきたの」

「ああ、内地の方ですか」

「ん、あたしはね　あそこでひっくり返ってるのはもっと北のほう。でかいのと細いのはここよりずっと西。出身は別々らしいけど」

「旅先で一緒にいられたんですか」

「ううん、会ったのは長安。ええとね　まあ、いろいろあった

のよ」

媛はそれ以上、聞かないことにした。

客商売をしているからには、そうしたところも心得ている。

「あそこで寝てるのが劉嬰。だらしないけど、あいつがあたしらの大将　なわけね」

「お若いのに、凄いですね」

「まあね　で、腕相撲やつてる樽みたいなのが弓林。あたしらは　將軍　って呼んでる。扇子を振ってるのが方望。あれは　先生　ね」

「面白い方々ですね」

「面白いけどね。世話が焼けるっていうか、手間がかかるっていうか」

また笑うしかなかった。

「で　あたしは　姫　とか言われてるわけ。照れるね、ははは」

「あの、どちらまで行かれてたんですか？」

「そりゃもう、あつちこつち。ヤルカント 莎車、カシユガル 疏勒国、サマルカント 康国　ひと晩じ

やとても喋りつくせないな」

「羨ましい　あたしも、いつてみたいな」

媛の父親は寡黙な男だったが、それでも機嫌のい時に何度か、幼い娘に旅の思い出を語って聞かせたことがあった。

内容を理解するほど知識はなかったが、それでも懐かしそうに目を細める父を通じて、はるか西にある世界に憧れたものだった。

「連れていつてあげてもいいよ」

「え　？」

「ただし、あそこで寝こけてる奴がいいと言えただけど」

まるで行き倒れのように転がって、涎まで流している　大将　こ　と劉嬰のことであった。

「言ったでしょ。あいつが　大将　だから。あいつがいいと言った

ら、あたしら否応ないの」「
「そ、そんな」「

冗談にしても突飛すぎて、媛は困惑してしまった。

「はは、ごめんごめん。苛めちゃった?」

「そ、その、あたしには旅籠もありますし」「

「あなた、真面目ねえ。うん、そういうことにしときましょ。でも、あいつならいいって言うと思うけどな」

「あのう、劉嬰さんですか　あの方はどういう」

「あいつ?一応、あたしの旦那ってことになってるけど」「
「え　?」

迂闊なことに、ふたりが夫婦だとは考えもなかった。

媛は耳まで赤くなった。

「あらら、なんであなたが照れるのよ」

「いえ、その」「

「はは、そろそろ潮時みたいね。今日はこれでお開きにしときましょ。二階、泊まれるの?」

「あ、は、はい」

「じゃ、ご厄介になるね　みんな!今日はお開きだよ。寝るべし、寝るべし!」

腹がくちくちくなって、それぞれ好き勝手なことをしている仲間に、よく通る声で麗華が宣言した。

「そうそう、支払いは塩でいいよね?」

部屋の反対側では　将軍　こと弓林が、二十連勝の勝鬨をあげて

いるところだった。

方望 先生 は他の客を賭けをはじめ、倍々になっていく賭け金で、そこもちよつとした賑わいになっている。

床に転がったままの 大将 劉嬰は、あるうことか顔に落書きをされていた。

騒がしい珍客に巻き込まれるかたちで、久しぶりに酒場は賑わっていたのだ。

それらが、一瞬にして静まり返った。

「・・・」

店内の誰もが、麗華を凝視して固まっている。

「なんや。どした」

怪訝な顔の弓林が周囲を見まわした。

方望も困惑しているのか、無言で扇子を揺らしている。

「どしたの？」

「それは 受け取れません」

「なんで？ 楼蘭産の特上モノよ？」

今度は店内がどよめいた。

歓声ではなく、同情と絶望の入り混じった呻きに近かった。

四 モノはあるのに金はなく、それぞれ金策にむかうこと

小国が興っては滅ぶ西域では、物々交換の商慣習が根強い。

古代の貨幣といえば金銀銅だが、また国家が衰退していくにつれ、その含有率も落ちていくのが、この時代の貨幣でもあった。

例えば同じ時代、地中海世界を席卷したローマのデナリウス銀貨も、後世の衰退期になるほど質が落ちていく。

通貨への信頼は、国家への信用でもあるのだ。

そこへいくと塩や穀物は、人が言わず限り一定の価値を持つ。

国が揺らげば鉄屑同然になっていく貨幣より、価値の損なわれない物品のほうが、信頼されるのも道理だった。

まして漢はついこのあいだ、一度滅んだばかりではないか。

だ。

「禁じられているんです。塩は 太守公館で換金してください」

この交易都市・敦煌の旅籠で、若女將の媛はこんなことを言う。

しばし啞然とした麗華だったが、彼女は立ち直りの早さが身上でもあった。

「ああ、そっかそっか。ごめん、ごめん」

しきりと頭を掻きながら、

「敦煌だって漢の一部だもんね。あたしとしたことが、塩と鉄は国家専売だったの忘れてたよ、ははは」

たしかに、塩と鉄の国家専売法は紀元前百二十年、武帝の時代に制定されている。

「こりゃ、うつかりしてた。旅籠がお上に睨まれたら商売にならないよね。困らせちゃってごめん！じゃあ、こっちでどう？チベット産の明礬。すごく奇麗に染まるよ」

だが、媛の表情はかわらなかった。

「ごめんなさい。それも駄目なんです」

「あらら。じゃ、これは？ヤギの毛皮、カシミール産だよ。ふわふわ気持ちいい」

「本当にごめんなさい。この敦煌では、交易ができないんです」

曰く、国外産の物品を受け取るだけで、交易と見なされるのだという。

敦煌が仏教都市の性格を帯び、郊外に有名な莫高窟ができるのは、これより三百年後のことであり、この時代の敦煌は純粋な商業都市だった。

二千年後にはシルクロードと通称される、東西交易路の起点を中国とすれば、その道は敦煌まできて三本に分岐する。
すなわち、

タクラマカン砂漠の南部のオアシスを、飛び石で進む西域南道。
かの楼蘭で有名な、この時代におけるメインルートの天山南路。
そしてこの時代になってから開拓された、新ルートの天山北路。

人と物の流れを逆にみれば、三本の交易路を運ばれて集まる扇の要が敦煌であり、ゆえに商業都市としての重要度はかつての長安、今の洛陽にも劣らない。

そんな敦煌で、交易が禁じられているという。

「なんで？」「なんでや？」「なにゆえ？」

異口同音ならぬ、異口異音に返す旅人の疑問も、それがいかに奇異なことかを物語っていた。

「そういう決まりなんです、ごめんなさい」

消え入りそうな声だった。

「でも、今日は本当に楽しかった。皆さんと一緒にいると、悲しいことや辛いことを忘れます。今晚は、どうぞ二階にお泊りください。明日、換金したら お代を頂きますから」

「ここまで言われては、さすがの麗華も自慢の口がまわらない。

「 いやいや、どうにもわかりません」

寝転がっていた劉嬰が、ぼりぼりと頭を掻きながら起き上がった。

「なによ、起きてたの？」

麗華が下唇を突き出した。

「いや、いま起きたんですけど どうやら、こみ入った事情があるようじゃないですか」

劉嬰はのぞきこむように媛を見て、

「まあ、お代は明日まで待つて頂くとして、取引ではなく換金 僕にはどうもその言い回しが気になります」

「どうか、悪く取らないでください」

「それに、あなた知ってますね。僕らが換金　とやらをしに
いて、そこで何が起こるかを」

どう考えてもそれは、あまり好ましくない状況のようだった。

「いったい、この敦煌に、いったい何が起きているんです？」

媛は黙って俯くばかりだった。

「おう、らしくないやないか」

熱血漢の弓林が喚いた。

「姉ちゃん困らして何するつもりや。要は現ナマがあつたらええこ
とやろ。違うか？」

「なにか名案でも？」

「ここは国境や」

弓林はにやりと笑った。

「国境には必ず軍が駐留しとる。けど、戦争してへん兵は暇なもん
なんや。経験上、これは間違いないねん」

言いながら腕をぐるぐる回し始めた。

「ワシ、ちよつと稼いでくるわ」

「乱暴なことしちやいけませんよ」

「するかいな。この店でやったのと同じことするだけや。実に紳士
的やったやないか」

「僕は寝てたから、わかりませせんけど」

「まあ、待つとつてや。鶏さんの鳴く頃には戻るわ。そしたら、明日はまた楽しく騒ごやないか」

要するに、チエックアウトまでに賭け腕相撲で、ひと稼ぎしてくるつもりらしい。

もう商人というより、ほとんどやくざ者。 。
そんな視線など、どこ吹く風で、

「ほな、言ってくるわ」

高笑いとともに、弓林は店を出ていった。
皆、呆気にとられて見送るしかなかった。

「では、私も金策に赴きましょう」

方望が悠然と笑みを浮かべ、扇子をゆらめかせて立ち上がった。

「方望先生も？腕相撲で儲けるんなら、はやく追っかけないと」
「いえいえ。賭博はあくまで娯楽。資金の調達は、より信頼性の高いものであるべきです。弓林のでは心もとないので、私は別口で参ります」

につこりと笑った口元から、輝く歯がこぼれていた。

「ツテがあるんですか？」

「より優雅に 人脈 と呼びましょう。これにまさる金策は皆無と
さえいえます」

「そつえば、先生ずいぶん 鳥 を飛ばしてたね」

思い出した麗華が言った。

「誰かに渡りをつけたの？」

「実は太守どのの部下に不遇をかこっている古参武将がおります。まず金に困っていることはございますまい」

「不遇 頼りになるの？そのひと」

「この將軍の奥方に連絡がついております。なかなか面白い話が聞けそうですよ。ついでに少々の子金を無心しても、まず断られることはないでしょう。では、しばしお待ちあれ」

弓林も扇子をふりふり出て行った。

またしても、人々は呆然と見送るしかない。

「先ほどはすいません」

劉嬰が頭を下げた。

「他所者には話しにくい事情もあるかと思えます。僕はそのへん空気が読めなくて、いつも思ったことを言っちゃうんです」

「そうよ。あんた、いつも立ち入ったことを訊き過ぎるのだよ」

「いつもこうやって叱られるんです。あの、本当にすいません」

「そんな」

かえって媛はまごついていた。

「で かさねて厚かましいんですが、代金の支払いまでは、我々ふたりが担保ってことで」

劉嬰は恐縮しきりだった。

五 すぎなくされて啖呵を切り、やがてすたこら逃げるこ

「ちょっとあんた、人を見てものを言いなさいよ」

表情こそ笑顔だが、麗華は声を低くして凄んでいた。

朝になつても、弓林と方望は帰ってこなかったもので、仕方なく公館が開くのを待つて物品を「換金」しに来たのである。

「女だからつてなめないでね。商売どころじゃない、そんな値段じや仕入れの半分にもならないから」

「そうはいいましてね」

公館の役人はとりあわなかった。

「塩、銀食器、絨毯、胡麻、干し葡萄 フムフム ありき
たりですな」

「どこに目エつけてんの。ほら例えばこれ銀食器。光沢、曲線の出し方、全体に溢れる気品 ギリシャの名匠ポポンデウスの、それも円熟期の作とみて間違いないでしょ」

麗華は銀の皿をかざしながら何度もひっくり返し、ホウと溜息をついた。

「惚れ惚れしちゃうね。けど、二度とつくられることはないんだよ。数々の傑作を生んだ工房はローマの大火で灰となり、失意のポポンデウスはアテネに帰って寂しい晩年を送った。栄光につつまれた天才の、あまりに哀しい最期だったな」

「まるで見てきたかのような」

「常識だから。で、これにいくらの値をつけるわけ？」

「銀食器は銀食器です。絨毯は絨毯。壺は壺。それぞれ買値がきまっています」

「算盤も弾かずに買値ってどういうことよ」

「買値が決まっていますから、算盤は必要ありません」

「あんだ、芸術つてもんがわからないの？そこの品とはわけが違うのよ？デデンポウスの傑作なのよ？」

「ポポンデウスでは？」

「素人はこれだから」

麗華は大きく嘆息し、肩をすくめて首を振り、ついでに二、三歩よろめいてみせた。

「ガイウス・ユリウス・デデンポウス・オクタヴィアヌス・ポポンデウス。それが本名よ。大秦（ローマ帝国）の人はいっぱい名前があるの。常識でしょ？どれも同じ人」

「はあ」

「で、どうなのよ。この芸術にいくらの値をつけるの？」

役人は表情をかえなかった。

「銀食器は銀食器です。買値はきまっています」

* * * * *

「なっていない！」

麗華はまくしたてた。

粘りに粘った結果は、交渉の決裂だった。

いや、交渉にすらなっていない。

「買値が決まっています」

役人はこの一点張りだった。

おかしな話ではある。

麗華の売り口上　アテネの名匠が云々　　が本当かどうか
はともかくとして、出来や希少価値を評価額に加算するのは常識と
える。

ふっかけておいて落としどころをさぐるのも、そう珍しくはない。
それがまるで通じなかった。

役所仕事といえればそれまでだが、そもそも商売相手が公館に限定
されるのもおかしな話だ。

麗華が粘りに粘っている最中、劉嬰は隣り合わせた商人にそつと
取引を持ちかけてみた。

「どうです？」

碧眼に高い鼻、おそらくは西域のさらに西の出身であろうその男
は、返答の代わりに諦めた様子で首をふった。

商品が被るためかとも思い、漢の内地から来たとおぼしき商人に
もあたってみたが、結果は同じだった。

誰も彼もが、役人の言い値で苦勞して運んだ商品を手放している
のだ。

それは商取引ではなく、もはや、

（ただの換金だ　　）

そう表現していた意味が、ようやく理解できたのだった。

「なにをぼんやりしてんのよ!」

麗華が腹立ち紛れに、劉嬰の尻を蹴り上げた。

「痛た」

「わかってんの? あんなんじゃない、手元に何も残らないじゃない」

「いや、ちよつと考えごとをしてまして」

「考えるまでもないから」

「変だと思いませんか?」

「変なのはあいつよ」

「いや、それも変なんですけど」

劉嬰は声をひそめた。

「その変なのを相手にしてる商人も変ですよ。仮にここで商売できないなら、よそでやればいいじゃないですか。なんなら素通りして中原に入ったっていい。なんで皆がみんな、不利な取引を渋々やってんでしょ」

「が、ついてないんじゃないの?」

気が立っている麗華は、劉嬰が顔を赤らめるようなことを言う。

「天下に聞こえた砂漠の都も落ちたもんね。商人の気概つてもんがまるでないんだよ。だから役人なんかにつけこまれるんだ」

思わず言葉に力が入る。

そして劉嬰が何か言う前に、麗華は決心を固めてしまっていた。

「よっしや、見てなよ。なんにもわかってない役人風情に、叩き上

げ商人の根性つてのを見せてやるつじやない」

喧嘩を売る気、満々である。

「まさか」

嫌な予感がして、思わず劉嬰はどきりとした。
そのまさかだった。

* * * * *

「さあ、らっしやい、らっしやい！」

よく通る甲高い声が往来に響き渡った。

「さあ見て、見て、見て、見て」

どこかで聞いたようなことを言う。

止める間もなく麗華は、ふたりで担いで来た荷物をそこらじゅうに広げて、

「損はさせない見てって頂戴、遠く河南は南陽の、音に聞こえた陰家とくれば、百代続く大豪商。何を隠そうその末裔、女だてらに西へ東へ、誰が呼んだか旅する大店、血は争えぬ南陽生まれ、いまは嫁いで劉家の麗華、どうぞ皆様お見知りおきを」

とばかり、いきなり威勢よく啖呵売りをはじめたのだった。

「いえいえ嘘は申しません。論より証拠がこの干し葡萄、見ればうっとり色も鮮やか、それもそのはずトルファンの、滋味にあふれる土と水、たっぷり吸い上げ溜め込んで、燦々輝くお日様に、照らされること八十八日。口に含めばまったりと、広がる気高い甘味と酸味、ひとつ食べれば疲れが吹っ飛び、ふたつ食べれば元気百倍、みつつ食べれば後は病みつき、それがきっかり千と百粒。大きな声じや言えないが、遠く都は長安の、恐れ多くも王莽陛下が、ご所望された至極の一品、さればと万難乗り越えて、探し求めて献上すれば、一獲千金間違いなしと、はるばる行った西の果て、やっとのことで買い付けて、戻ってきた日にや新帝は、いくさに敗れてあの世へおなり、またまた中華は漢家の天下。さればさればと漢朝の、威光あらたか今上陛下に、捧げて金子にかえようと、抱えて来たがそれが浅はか、なぜなら陛下は甘味がお嫌い、さてさて困った干し葡萄。それならこちら自棄のやんぱち、日頃我々行商が、お世話になつてる敦煌の、皆様にご奉仕だ、もはやこちら路銀で結構、但しお代は金子でお願い、五十粒づつ二十二名様、早い者勝ち持つてけ泥棒！」

まさに立て板に水。

(よくもまあ、そんな　大嘘を)

あきれる劉嬰をよそに、往来をゆく人々はしだいに足を止め、やがてまばらな人垣ができ、その輪が幾重にもなっていくうちに奪い合いとなり、瞬く間に売り切れてしまった。

「どもども、毎度ありイ！」

「たちまち麗華は上機嫌だった。」

干し葡萄が売り切れても、まだ取り巻く人々の熱はさめていない。

これを見送る麗華ではなかった。

「さてさて皆様、御立ち会い。これで帰るは気が早い、次なる珍奇はこの剣だ。見てよこのツヤ目も眩む。それもそのはずこの剣は、砂漠を越えたカーブルの、近頃流行りのクシャナ朝、希代の英雄カドフィセス、彼が帯びたるこの剣の、いわくを聞いて驚くな。実はこの剣またの名を、皆様先刻ご承知の、かの有名な霊金内府。今を去ること二百余年、漢を起こした初代の帝、みんなの英雄・劉邦がある日歩けばその先に、大きな白蛇が横たわる。さてもと英雄・劉邦は、従者を制して剣を抜き、牙むく白蛇を一刀両断。しかして後に現れた、白蛇の母という老婆、さめざめ泣くはかかる訳あり、曰く白蛇は当時の天下を、チカラで牛耳る秦の象徴、それを斬りたる我らが劉邦、まさにこの時劉邦の、天下を取ったは約束された。以来これこそ漢朝の、まごうかたなき伝家の宝剣、それが此度の戦乱で、どさくさのなか流出し、流れ流れて砂漠越え、流れ着いたはクシャナ朝。ここが腕の見せどころ、買い戻したる中華の至宝、これを大事に保管して、ゆくゆく新たな漢の首都、洛陽に届けてくれりやそれが本望。望みは託した儲けは抜きだ、またまたお代は金子でお願い、早い者勝ち持ってけ泥棒！」

悪乗りが乗りに乗りまくってまくっている。

(いいのかな　そんなこと言っちゃって)

カドフィセスとは、古代インドにおいてクシャーナ朝の礎を築いたクジュラ・カドフィセスのことだろう。

後漢書・西域伝にも登場するこの英雄は、現在はアフガニスタンの首都にあたるカーブルの周辺から、パキスタン北部にかけてを支配したといわれている。

その後、彼の子孫がさらに勢力を拡大し、クシャーナ朝はササン

朝ペルシアに敗れる三世紀まで、中央アジアの大国として君臨した。そもそもクシャーナ朝の皇室は、中国東北部にいた騎馬民族 月氏が起源であるとされる。

とはいえ、他の騎馬民族に圧迫されて流れ着いた中央アジアは、文化的にギリシア・ローマの影響も色濃い。

現代でもカーブルからガンダーラにかけて、カドフィセスの肖像が刻まれたコインが出土するという。

もちろん、一世紀初頭を生きる劉嬰は、そんなことは知る由もない。

(怒るだろうなあ あの人)

そんな心配をしていた。

気を揉む劉嬰をよそに、暴走気味の勢いにまかせて、その日のうちにすべての商品売り切ってしまうつもりは麗華だった。

しかし。。。

「こら、貴様らア！」

やっぱりというか、二人連れの兵士である。

「あつ」

人々はそう短く叫んで、あつと言う間に散ってしまった。

「なんのつもりだ。誰に許しを得て、この敦煌で不浄の商いをしてる」

麗華は胡座をかいたまま、兵士を見上げていた。

ふてぶてしいとさえ言える態度で、もちろんのこと恐れる様子は

微塵もない。

「なんとか言わんかッ！」

「あの、旦那方」

かわりに答えたのは、ほとんど縮み上がっている劉嬰だった。

「手前どもは昨晚、敦煌に着いたばかりでしてございまして。なにぶんにも不

案内なもので、城内での露店がご法度とは露知らず

「知ってたよ」

麗華がそう言い放ち、

「また、そんな」

劉嬰が困った顔になる。

「ここは知らなかった、でお目こぼしをもらいましょうよ。ええ、手前どもはちつとも存じ上げませんでしたよ、旦那方」

「知ってたね。知っててわざと大通りでかましてやったんだよ」

「いいえ、存じ上げませんでした」

「知ってたっつもの！」

そんなふたりのやりとりを聞いていた兵士が、

「嘗めとるのか、貴様ら！」

と槍を構えた、その時。

劉嬰と麗華、ふたりが同時に動いた。

素早く間を詰めた劉嬰が兵士ふたりにしがみつき、

「旦那方、聞いてください旦那方あ！」

どこまでが真面目なのか、とにかく懇願しながら動きを封じる間に、麗華がくるくると荷物をまとめ、

「もういいよ！」

劉嬰もまた兵士を離して走り出したが、

「あ、これはいけない」

思わずそう呟いたのは、人垣の向こうに新手の兵士が見えたからだ。だった。

振り返るとこちら側にも、最初のふたりの後ろに三人ばかり増えている。

続いてまたふたり。あれよあれよという間にまた三人、いったい何人が巡回しているのやら。

「これは、ただ巡回してたってわけじゃなさそうですね」

「密告られた？」

「たぶん」

「あのくそ役人」

それにしても連携の早さには、敵ながら天晴れというほかなかった。

麗華が素早く懐に手を走らせる。

何を出そうとしたのか、目ざとく見つけた劉嬰が、

「駄目ですよ。ここは人が多すぎます」

「けど、このままじゃ」

「荷物は諦めましょう」

なにか言い返しかけた麗華も、さすがにこの状況では諦めるしかない。

まさに断腸の面持ちで、風呂敷に包んだ商品を捨てた。

劉嬰は両手を組んで中腰になった。

「そんな」

麗華の表情に、ありありと不安が浮かんだ。

「さすがにこの状況じゃ、ふたりは逃げ切れません。でも、麗華さんだけでも逃げ切れれば、ふたりに事態を伝えられますから」

背後にはどこの屋敷のものか、高い塀がそびえている。

「でも」

「僕は大丈夫。行ってください」

「いやだよ、だって　あたし、二度と」

「これしかありません」

それでも麗華はまだ躊躇していたが、

「はやく」

促されて渋々、助走に入った。

組み合わせた両手を踏み台に、呼吸を合わせて跳躍すると次の瞬間、重力から解き放たれた麗華がふわりと宙に舞う。

その高さたるや。 。
兵士や見守る見物人も、ぽかんと見上げるしかない。

「馬鹿な」

心細げな表情のまま、高々と宙に舞ったその身体が、五メートルはゆうにあるうかという城壁を軽々と越えていった。

その向こうは、誰の屋敷の邸内なのかは知らない。

だが一旦、身を隠せばおいそれを敵に見つかる彼女ではないことを、劉嬰はよく知っていた。

「はい、もう逃げません。逃げませんから」

数十本の槍の中で、劉嬰はホールドアップした。

六 試合に勝って勝負に負け、かつ身ぐるみ剥がれること

用心しながら、麗華は旅籠に戻った。

城外に繋いでいる駱駝と積み荷は、すでに押さえられたとみていいが、この旅籠に寄ったことは、まだ知られていないはずだ。

迷惑をかけるが、ここで落ち合うしかない。

もっとも昨夜の客に密告者がいれば、ここも安全とはいえないが

。細めに扉をあけた麗華は、油断なく視線を走らせた。

(大丈夫ね)

すべるように中に入ると、どこでくすねてきたのか、被っていた頭巾をはずして大きく息をついた。

緊張を保てたのは、そこまだった。

頭巾を揉みしだく手の甲に、ぱたぱたと涙が落ちた。

麗華は突っ立ったまま、子供のように泣き出したのだ。

何事かと媛が走り出てきた。

「ど、どうしたんですか」

しゃくりあげる麗華をなだめになだめて、媛はこの次第を知った。

「そんなことが」

とは言ったものの、さほど意外というわけでもない。

垣間見た性格を考えれば、起こり得ることではあった。

(何故、とめてあげなかった)

麗華の背中をさすってやりながら、表情に何か決意が固まりつつあった。

このあたりの性格は、父親譲りであることに本人は気付いてない。

「わたし、何とかします」

麗華の耳に届かないよう呟いた。

その時だった。

「どないしたんや」

銅鑼声の巨漢が帰ってきた。

もちろん弓林だが、大股に入ってきた姿を見て驚いた。

「ぎ、ぎや」

媛が悲鳴を発することもできずに顔を覆う。

弓林は太い二の腕はおろか樽のような腹もあらわに、下帯ひとつの半裸で恥じ入ることもなく、ふんぞり返ってのし歩いていたのだ。

よくもこれで、街中にいる兵士に誰何されなかったものだ。

「なにしてたのよ」

麗華が涙声で詰め寄った。

「なんや、ベソかいとったんか。なにがあったんや」

「こつちが聞いてんのよ」

「ああ、これが。たいしたこととちゃうねん。あのな」

弓林はことの顛末を語った。

* * * * *

弓林が出向いた先は、やはり軍隊の駐屯所に近い酒場だった。そこで非番の兵士を相手に、金を賭けて腕相撲を持ちかけたのだという。

体格からして、そこらの兵士では勝負にもならないので、ふたりを同時に相手することにした。

ところが兵士ふたりが両手でかかっても、弓林は顔色も変えずにばたりと倒してしまう。

「困ったやつらや。もっと腹に力いれんかい」

これでは賭けにならないということになった。

ふたりを三人に増やし、やがてそれを左右の腕で別々に相手することになり、それを一晚中やって、懐はだいぶ暖かくなった。

「どや」

もちろん弓林は上機嫌である。

だが故郷を離れた国境の兵士は、給金だけを慰めに行っている。

酔った弓林は、それを忘れていた。

根こそぎ巻き上げた弓林は、勝負事とはいえ、彼らの恨みをかっ
た。

ほどほどに勝つなら羨まれるだけだが、ひとたび勝負が始まれば、とことん勝ち負けをきわめないと、気の済まない性分が災いしたのだ。

空が白みはじめる頃、すべてを巻き上げられた兵士たちは、声をひそめて何か相談をはじめたらしい。

夜半からまた呑みはじめた弓林は、もう目の焦点が合わないほどに酔っている。

「んじゃ、そうすんべえ」

相談がまとまって、新兵のひとり近所の娼館に走った。

弓林が諸肌脱ぎの肩に玉の汗を浮かべながら、並々と注がれた酒を煽っているところへ、新兵が娼婦を連れて帰ってきた。

「あら、なんて遅い」

歯の浮くような棒読みだったが、もうそれと悟る判断力がなく、

「ん、そうか？」

たちまち、だらしなく目尻が下がってしまう。

湯気を立てている巨漢の猛々しさに引き気味の娼婦が、何かあれば必ず助けるといふ兵士の目配せを頼みにしながら、何とか弓林を外に連れ出した。

見え隠れに兵士が続く。

「おいおい、どこまでいくんや。人ツ気のない、暗あいところか、ははは」

よろめきながら、よたよたと女についていく先に、一軒の空き家があった。

そこまで誘導して、いい加減に酔い潰れたところで、事を起こすつもり計画だったが、

(はん、仕掛けてきよったな)

実は弓林、ついてくる兵士に気づいてはいた。

が、おぼろげながら記憶があるのもまた、ここまでだった。

泥酔した弓林は、目的の場所まで行きつくことなく、路地裏で寝入ってしまったのである。

大いびきをかく巨漢の衣服をあらためるだけでも、大変な重労働だっただろう。

「やりよったで、あいつら」

こついうとき、怒るより笑い出してしまうのが、弓林という男だった。

見回すと自分は下帯ひとつ、あられも色気もない姿で、道端に寝転がっていたのだ。

もちろん一晩の稼ぎは水の泡、どころか本当の無一文だった。

とにかくも、仲間のところへ帰らなければならない。

とはいえこんな男でも、この姿はさすがにどうかと思われたので、ひとまず駱駝を繋いである城外に戻ろうとした。

ところが、城門から出られなくなっている。

「どつしたんや。あやしい奴でもおったんか」

暢気に門番に尋ねたが、

(あぶない奴だ。関わらないほうがいい)

程度に思われる程度で済んで、かわりに「事件」のあらましを聞

いたのだった。

* * * * *

「てなわけや。わし、すぐにピンときたで。ああ、こりゃウチの大將と姫さんやな　　またなんぞ、やらはったんやな、てな」

自分を棚に上げて、こんなことを言つてのける。

麗華の眉がきりきりと吊り上がった。

「あんたこそ、兵士相手に悶着なんか起こしたりして」

「けど、ワシのはもうカタついとんねん。あいつらワシの顔みたら逃げよるやろうけど、ワシのほうは逃げる理由ないで」

「結局、負けたわけじゃない」

「せや。試合に勝つて勝負に負けた、はこのことやな。けど姫さん、酔つてもワシ、あいつらの顔ようおぼえてんで。勝負うちゅうのは最後に勝つたらええねん。今度、見つけたら　　」

そつとそぶく弓林に、何か言いかけた麗華は次の瞬間、絶句した。視界に、ぺた、ぺたと足音まで緊張感なく、またしても半裸の男が入ってきたのだ。

方望である。

弓林と同じく下帯ひとつ、そのくせ顔はさも涼しげに、相変わらず扇子だけは顎の先でゆらめかせている。

「き、きやあああつ」

今度こそ媛が悲鳴をあげた。

「おやおや、どうなさいました？」

正視できない媛にかわって麗華が、

「そつちがどうしたんだ！」

「どうとおっしゃいまして、ご覧の通りございまして」

「なんで、あんたまで裸なんだっつもの！」

「裸とは心外ですな。ここにこうして下帯を」

「いちいち取るなッ！もう、どいつもこいつも！」

ついに麗華がキレた。

手近なものを手当たり次第に投げ付け、弓林は扇子でそれを打ち落とす。

弓林は喜び、しきりに手を打ちながら大声で囃し立てた。

顔を真っ赤にした媛が、悲鳴をあげて狭い店内を逃げ回る。

料理人まで出てきて、皿や椀が飛び交う度に、素っ頓狂な悲鳴をあげて手足をばたつかせている。

騒ぎが収拾されるまでに、小一時間もかかった。

「あのう、姫どの」

「なによ」

「そろそろ申し開きをしても、よろしいでしょうか」

息のあがった麗華は、

(勝手にしなさい)

と、手を振った。

媛と料理人も、迷惑な客の傍らに立ちつくしている。

見れば、あれほど飛び交った皿も椀も、一枚たりとも割れていない。

これは麗華の正確なコントロールを証明すると同時に、それをことごとく受け切った方望の、神業ともいえる扇子さばきを示していた。

おそらくは互いの技量を把握したうえでの大立ち回り、いわばストレス発散をかねたレクリエーションなのだが、傍から見ているなどは、

(このひとたちは)

と、笑顔を顔に張り付かせたまま、卒倒しそうだったという。

七 招かれて歓待され、のちに追い回されること

ともあれ、方望は語り出した。

出向いた先は、趙という名の將軍の邸宅だった。

「もちろん、趙將軍に面会を求めたわけではございません」

「わかっているから、そんなこと」

「念の為」

会いにいったのは將軍の妻だった。

筆マメの方望は、旅先でもしきりに手紙を書く。

もともとこの時代のことなので、それは紙ではなく細く切った竹や木片にしたためるのだが、弓林はそれを人づてに渡すのではなく、鳥の足に括りつけて飛ばすのである。

それは鳩であったり、季節によっては燕や鴨であったり、時として烏や鳶であったりするのだが、どの場合も必ず宛先に届くという。

方望はこれによって、あちこちの女性と連絡をとり、立ち寄るさ
いには暫しの逢瀬をたのしむのだ。

「ところが、間の悪いことに」

とぼけたプレイボーイは、表情に憂いをつくって嘆息した。

「敦煌市街に変事があったらしく、しばらく城外を巡行するはずだった趙將軍が、急遽ご帰宅なさったのですよ」

「ああ。わし理由、知ってんで おっと」

麗華に睨まれて弓林は口をつぐんだ。

「まさしく、寿命の縮むような体験でございました」

* * * * *

超將軍の夫人は艶容な人妻だった。

地方貴族の妻妾は、身分は高くても退屈なものである。

方望にしてみればそこが付け目で、連絡さえつけておけば、暇を持って余した細君の歓待を受けるのも難しくはない。

何しろ彼女らが喜びそうな土産話なら、それこそ売るほどあるのだ。

おまけに長身で眉目秀麗とくれば、放っておかれるはずもなかった。

「遅かったじゃない。待ち焦がれたわ」

のっけからクネクネと招き入れる。

王侯でも迎えたかのような宴席が用意され、旅籠であればほど飲み食いた方望も、それを忘れたかのように舌鼓を打った。

この細い身体はどこに入っていくのか、贅をこらした大皿が次々と片付いてしまう。

「まあ、何て遅しい」

優男の意外な野性味に、夫人は終始、期待を込めた流し目を送っていたそうだ。

* * * * *

「いやいや、この旅籠に較べますれば、決して褒められた味ではないかもしれませんが、されど歓待に応えてこそ客人、ここに、その道の秘

訣がございまして」

「いいから先、続けて」

頬杖をついた麗華は、あきれて聞いている。

その険しい眼差しを知ってか知らずか、方望は歌うように語り続けた。

* * * * *

「ほらほら、もう一献」

と酒まできこしめした方望が、羽毛の心地で招かれるまま夫人の寝所に誘われると、

「さあ、くつろぎ遊ばせ

」

そこはもう部屋が煙るほどの香が焚かれて準備万端、薄手の衣をまとった夫人が、夜具の上からおいでおいでをしている。 。
そこへ帰ってきたのが趙將軍だった。
それこそ戦場のような騒ぎとなった。

「あ、あの男が屋敷に闖入し、わたくしや下女を脅しつけて料理を用意させたうえに、腹が膨れると今度はわたくしを、あなたの妻であるこのわたくしを

」

すかさず夫人が声を震わせて保身に走る。

逆上した趙將軍が抜刀に及ぶ。

「きさま、そこを動くな」

「動かないと、どうなるのでございましょうか」

「知れたこと。その首、叩き落としくれるわ」
「されば、動かないわけには参りませぬ」

下帯ひとつの方望は邸内を逃げ回り、物陰に隠れては見つかって、朝が来るまでそれを繰り返すはめになった。

「鼠一匹、まだ捕まらんのか！」

広大な屋敷が、この時は家主の仇となった。

すばしこい方望は捕まらない。

といって、邸から出ることも俣ならない。

「やれやれ　　せめて服だけでも取り戻したいものですが」

厠の天井裏に逃げ込んだ方望は、ゆらゆらと扇子をはためかせながら独りごちた。

しかし、それも手遅れだった。

逆上した趙將軍が、方望の衣服をずたずたに引き裂いてしまったからである。

「ものの価値が解らない御仁ですな」

朝方になってようやく屋根によじのぼったが、矢を射かけられてまた身を隠す。

庭園を逃げ回り、池に飛び込み、床下に逃げ込んで、太い梁によじ登り　　。

そんなことを延々と繰り返し返して、最後は肥桶を乗せた荷馬車の下に張り付き、やっと脱出したのだという。

まさに、這々の態であった。

「いやはや、とにかくにも おや、皆さん？」

見るとその場の全員が鼻をつまんでいる。

「はて、臭いますかな？これでも井戸で身を清めてまいったのです
が」

八 ぶん殴って飲ばれ、褒められて腹が立つこと

趙將軍は、すこぶる機嫌が悪かった。

「貴様ら、何をたるんでおるか！そんな様で、この敦煌が護れると思つてか！」

部下のささいな落ち度をみつけては、容赦なく鞭がとぶ。

露天で商いをしていたという男が、なにひとつ口を割らないものだから、不機嫌はひとしおである。

そうでなくても張將軍は苛立つていた。

言つまでもなく、妻のことである。

武骨な彼にも、妻が男を引き入れて浮気を企んだことくらい、ちやんとわかつていた。

この時代の、しかも武人の家のことだから、本来ならその場で手打ちにしてもおかしくはない。

家父長権が絶大だった古代の社会とは、そうしたもののなのだが。

(できぬ)

趙將軍は苦々しく思った。

理由のひとつは、夫人の実家である。

彼を筆頭とする趙家よりは、よほど格のある家柄だった。

武人としては有能な趙將軍だが、世渡りはあまりうまくない。

そんな彼も敵は国外だけではなく、身内にもいることは理解していた。

そして、ライバルたちに睨みを効かせているのが、自分のささやかな武功ではなく、妻の実家のもつ威光であることは、不本意だが

認めざるをえないのだった。

理由のもうひとつは、夫人そのものの存在である。

(できぬ)

將軍は、ぎりりと奥歯を噛み締めた。

憎悪さえ覚えながら、決して離れることができない。

その煩悶を、夫人もまた見透かしていた。

政略結婚で夫となった男が、実は身も世もないほど自分に惚れ込んでいたのを、本能的に嗅ぎ取っていたのだ。

それがわかつていているから、不貞の現場に踏み込まれてなお、見えすいた演技が通ると信じて疑わない。

事実、今度もまた許された。

それどころか闖入者から貞操を守った妻を、渋面ながら讃えるまですしたのだ。

(悪気はないのだ)

つまるところ、この哀れな武人は妻の演技を憎みながら、一方でその子供じみた浅はかさを愛さずにはいられないのだった。

(不甲斐ない 何というざまだ)

その苛立ちは、部下への鞭となってあらわれてしまう。

「早う吐かさぬか。あの男は何者で、女はどこへ逃げたのだ。あれだけの荷をもって、ふたりということはあるまい。一味もろともにひっ捕えよ。よいな」

もちろん劉嬰のことだった。

軟弱そうにみえるが、いくら責め立てても口を割らない。

趙將軍みずからしばらく痛めつけてみたが、のらりくらりと名前さえも口にしないのだった。

「言わんか！お前の名は？どこから来た？」

「旦那、僕ら知らなかったんです。ほんとスイマセン。勘弁してください」

「一緒にいた女は何者だ」

「何者かというところ自分が何者かなんて、わかる人がいるんでしょうか」

「きさま、まだ痛めつけられたいとみえるな」

「苦痛に快感が伴う方もいるそうですが、僕はちょっと
よ　　うん、これはこれで　　いいかも　　待て

さっぱり埒があかない。

趙將軍にしてみれば、妻だけでなくこの男にも馬鹿にされているような気がして、腹立ち紛れに散々なぐりつけたのだが、

「明日はこうはいかんど。よいな」

痛めつけるほうの息が先にあがってしまふ始末だった。

まさに憤懣やるかたない様子で、あまりの怒気に、側近ですら近づくのが躊躇われる。

だが、そんな雰囲気は気にもならない人間もいた。

「ご苦労のようですな、將軍」

帰途についてすぐ、男が近寄ってきた。

いけすかない奴が来た、と思わず舌打ちをする。

振り向けば、やはり陳俊がしきりと山羊髭をなでていた。

にやにやと目尻のさがった顔つきが、癪に障って仕方なかった。

「これは、陳俊どの」

それでも型通りの挨拶をかわして、さっさとその場を離れようとしたが、不愉快な予測があたって案の定、陳俊はつきまとってきた。

「どうですか、例の男は。大手柄というではありませんか」

「なんの、鼠が一匹でござる」

「これはご謙遜を。して、何か喋りましたかな」

何を白々しい　　趙將軍はやつのこととで自制した。

いつそのこと斬り捨てれば、どんなに気が晴れることかと思うが、それは絶対にできなかつた。

なにしろ、光武帝の下で抜きん出た働きを示し、数々の武功をたてたというふれこみを、敦煌太守の曹延は頭から信じ込み、全幅の信頼をおいている。

そのため武官の長である趙將軍も、衛尉（警護長官）である陳俊と、その配下のごろつきどもだけは管轄外なのだ。

いまや太守の番犬気取りというだけでも虫の居所が悪いのに、どうも自分の地位まで狙っているように思えてならない。

（そうはいくか　　）

何をおいてもこの男の前でだけは、ぼろを出すわけにいかないのだった。

「もとより、ゆるゆる締め上げよと命じております」

「ほほう。さすがの余裕ですな」

「功を焦って死なせては元も子もありません。じっくり吐かせれば

「一味もろともからめ取ることできませんれば、ここは急がず責めるが肝要かと」

「これは恐れ入りました。小生なら半日のやつつけ仕事で、太守どのお叱りを頂戴するところでしたな。この陳俊、ひとつ教えを賜りました」

ちくり、ちくりと入る皮肉を聞き逃す趙將軍ではない。

表情こそ変えないが、ますます機嫌が悪くなる相手を尻目に、

「それでは、小生は太守どのに報告があります故」

ようやく陳俊は踵を返した。

頭上に湯気が見えそうな趙將軍は、

「大魚を釣りあげるのは、手間のかかるものでござる」

そう背中に声をかけるのが精一杯だった。

九 野心をもった太鼓持ちが、別の野心を育むこと

「け。よく言うぜ」

陳俊は耳がよかった。

趙將軍の捨て台詞も、しっかり鼓膜に捉えていたのである。

「奴さん、今度こそ殺しちまうかもな」

目もよかった。

趙將軍が、足早に牢屋へ戻るのを、しっかりと見ていたのである。もちろん、再度みずから尋問にあたるつもりなのは間違いない。武人はこうした時、自分の腕をもつとも信用するものなのだ。

「単純な男だね。かえって張り合いがねえや」

拷問の末に死なせてしまふようなことになれば、これは落ち度になる。

人命の軽いこの時代、拷問死じたいを問われるわけではないが、將軍みずから一味の可能性を認めただばかりではないか。

「ちつとばかり、そのへんも耳打ちしとくか」

太守の曹延は欲の深い男である。

結果的に密輸、密売の芽を摘めなかったとなれば、さぞ機嫌を悪くするだろう。

うまく煽って趙將軍を罷免できれば、敦煌の軍事権が転がり込ん
で来る。

(あと、一手だな)

海千山千の陳俊は、もうそこまで計算していた。

(ツキがめぐつてきたじゃねえか)

悦に入りながら官邸の門をくぐると、門番が槍を立てて直立不動の態勢をとった。

「ん　　ご苦労ちゃん」

ここが太守である曹延の住居も兼ねた、東西交易による富の頂点である。

(天子にでもなったつもりか　　)

陳俊は表情を歪めた。

漢の版図でありながら、なかば独立国のような敦煌である。

かつての長安や今の洛陽のような壮大さはないが、豪華な官邸には明らかに「あるもの」を意識した引見の間がおかれていた。

美しく着飾った曹延は、そこで来訪者より数段高い席から、見下ろすように迎えるのだ。

「あつ　　」

太守の姿を認めて、陳俊は小走りに駆け寄り、倒れこむように平伏した。

「陳俊めにござりますウ」

「おお、遅かったではないか」

背の低い曹延は、そのかわり太っていた。

胸や腕、指にはトパーズや玉などの宝石がきらめき、地中海風の派手なトーガをはためかせ、パルティア産なのか靴の先が反り返っている。

傍らには盆が並べられ、色とりどりの果実がうずたかく漏られていた。

曹延は緩慢な動作ながら、しかし丸々とした指を絶え間なくのばして、それらを口に運ぶのだった。

「どうだ、一献」

まだ日が高いのに、もう酒を嘗めはじめている。

陳俊はさらに頭を低くして固辞しながら、

「本日もご機嫌うるわしく、何よりと存じまするウ」

「なんの、そちのような有能な部下があればこそ、こうしてくつろがせてもらっておるわ」

大物気取りの曹延は、漢の帝位を篡奪した王莽の時代、中央より派遣された太守である。

儒教による厳格な身分制度のもと、専制君主を目指す王莽に寵愛されたこの男も、もともと儒者であったという。

さして統治能力もなく、そのくせ絶対者たらしとする王莽の、いわば太鼓持ちのような存在だったのだらう。

その甲斐あつてか、通商で潤う敦煌の太守に抜擢された曹延は、地理的に遠いのが幸いして、王莽が倒れた動乱にも巻き込まれずに済んだのだった。

光武帝が再興した漢帝国は国力が回復しきつておらず、まだ西域の再復にまで手が回っていない。

そこで、さしたる功績もないかわりに落ち度もなかった曹延が、黙認のかたちで太守に居座っているのだった。

「太守殿、小生は深い悲しみを覚えまするウ」

「ほう、どうした」

「なんとすれば、お言葉を返す無作法を致さねばなりませんウ」

「ふむ。わしは何か間違いを言つたかの」

「されば、ご無礼ながら申し上げますウ。非才なる我ら臣下が、まずは無難に御役目を果たせますのは、ひとえに太守殿のご威光が臣民あまねく行き渡り、誰もが敬服しきつているからに他ありませんウ。つまり小生など太守殿の徳を拝借しているにすぎませぬウ」

「は。抜け抜けと言いおるわ」

口ではそう言いながら、曹延の目尻はいよいよ下がって、眼球は肉の合間に没してしまつた。

太鼓持ちだつた男が権力を握れば、太鼓持ちのような男を欲するものである。

「まあ、近う寄れ。かくなる上は、どうしてもその腹黒い本音を吐かせてみせようぞ。ほれ、一献」

「やや、ご無礼の段、平にご容赦くださいませエ」

「いいや許さぬ。むむ、強情な奴。これは命令じゃ」

そんなやりとりがしばらく続いて、結局、陳俊は三杯ほど干した。

「いや、いや、小生、すっかり目が回りましてござりまするウ」

「何を申すか。これしきの酒で酔つということがあるか」

「こ、この陳俊、嘘いつわりは申しませぬウ。それが証拠に、恐れ多くも太守殿が幾人にも見えまするウ。これ以上、徳を増やされては敦煌に収まりきらぬのではと」

「ふム　　敦煌に収まりきらぬ、か」

細い目の奥が、ちらりと光った。

「陳俊よ。わしの徳は、敦煌の民に行き渡っておろつか」

「それはもう、間違いございませぬウ」

「そつか」

曹延は深く座り直して、視線を宙に泳がせた。

「儒の理にてらせば、商いは不浄の所業である。下賤の民が欲望のままに蓄財すれば、漢のように天下の乱れを招く。然るに交易は天命を受けた者が一手に行ない、下賤は与えられた身上で憤ましく治められるべし　これを、民は理解していような」

「教えは民の胸に深く染み渡り、疑いを持つ者すらおりませぬウ。ただ　　」

「ただ　　なんじゃ」

「先頃、迷い込んだ下賤の者どもが、この敦煌で白昼堂々、世を乱す行ないで往来を騒がしたとの由」

「そのことよ。捕えたと聞いておるが」

「一味が逃げておりまする」

「誰が尋問しておるか」

「趙將軍にござりまする」

「奴か」

曹延の眉間に小さな皺が寄った。

「優れた武人ゆえ、たちどころに泥を吐かせて、一味もろとも召し捕えるものとは思いますが」

「確かに、武人としての技量は疑わん。功もある。が、奴めそれを

いいことに、時折このわしに要らぬ諫言をしおる。儒の教えを体現したこのわしに、たかが武人ふぜいが、だ」

陳俊は黙って平伏した。

「それにな、陳俊よ」

「は」

「わしは、武人としても、そちが上と思っておる」

「勿体ないお言葉を」

陳俊は、顔を伏せたまま声を震わせてみせた。

「民から召し上げた不浄の財がある。不浄には不浄の使い途があるも理。数万でも数十万でも、望むがままに兵を与えてつかわずぞ。わしはな、陳俊」

曹延は声を低く落とした。

「王莽どのに代わり、今上陛下（光武帝）が洛陽で即位されたというが、他言は無用ぞ」

「御意」

「儒の理に照らせば少々、疑問に思うところがある。朕はいいや」

朕とはこの時代を溯ること二百年余り、史上初めて中国全土を統一した秦の始皇帝がはじめた一人称である。

前人未踏にこだわり、また何でもかんでも独占したがった始皇帝は、人や土地だけでは飽き足らず、一人称まで自分専用にしたのだ。つた。

そもそも皇帝という呼称からして、この時につくったものである。

天皇・地皇・人皇　。

すなわち神話時代における蛇身人首の神・伏羲と、人類を創造したとされる女神・女媧、そして農業と医療の守護神である神農を三皇といい、それに続く五人の人間の王を五帝という。

いずれも先史時代の理想的な統治者とされ、あわせて三皇五帝と称される。

古代の人々は、神、あるいは聖人が築いた究極のユートピアとして、彼らが治めたという神話の時代に、切なるあこがれを抱いたのだった。

皇帝とは、この三皇と五帝をあわせた造語に他ならない。

聖なるユートピアを築いた神と神話の王たちが束になった存在

。そう自らを定義づけたわけだ。

そう言い切って憚らない強烈な自負こそ、始皇帝を覇者たらしめた、巨大な個性なのかもしれない。

やがて秦にかわった漢王朝は、あっさりこれを踏襲してしまった。仮に、秦に滅ぼされた諸国が再興したのであれば、おそらく皇帝という耳慣れない呼称などは廃して、かつてのように王を名乗っただろう。

ところが、農民から天下人にまで成り上がった前漢の創始者・劉邦はいかにも大衆的な感覚で、

そんなに偉いのか。じゃあ、俺もそれでいい。

ゆえにそれ以来、

(朕といえは皇帝、皇帝といえは朕)

かつての王莽もそうだが、人間の感覚は麻痺をしてゆく。
あまつさえ、陳俊のような男が煽るだけ煽っているのだ。

どれほど大胆なことを口走ったか自覚もないまま、曹延は立ち上がり、窓辺に寄った。

窓は東に開いており、その遙か先に漢の本土がある。

「天下か」

しばし沈黙のあと、やがて太守・曹延はそう呟いた。

一〇 リアリストが陰口をたたき、小娘が脱獄を企画すること

太守官邸を退去するなり、陳俊はいまいましげに唾を吐き、

「け。俗物が、洛陽に進軍でもやらかそうつてのか」

ついでに指を喉に突き入れて、飲んだものをぶちまけてしまった。ぐいと口を拭って、そのまま何事もなかったかのように歩きだす。人というより、獣のような荒くれどもに揉まれてきた陳俊にとつて、このくらいは芸のうちにも入らない。

「天下だによ。まったく儒者が聞いてあきれるぜ」

呆れているのは、善悪の観点からでなかった。

モラルなど、薬にしたくても持ち合わせのない男である。

そもそも儒の教えを自分勝手に都合よく解釈した曹延に命じられ、商人たちから交易品を巻き上げてきたのが陳俊だった。

仕入れ値にも満たない売価に商人が応じないときは、手荒い手段で承知させるのが役どころである。

それどころか、敦煌を避けて内地に乗り込もうとする行商人を追いかけて、一切合財を奪い取るという、盗賊同然の仕事までこなしているのだ。

とにかく掠める、ぶん取るに躊躇も良心の呵責もない。

問題はその先だった。

モラルは欠如しているが、かわりに陳俊は徹底したリアリストだった。

で、あるからには現実をよく知っている。

王莽の新帝国が瓦解した後、陳俊が武将として大乱を生き抜いた

のは事実だが、猛将でも知将でもない彼は、その節操のない性格を唯一の武器としてきたのだ。

もちろん剣の腕にもそれなりの自負はあるが、

「所詮、敵わねえ奴には、敵わねえ」

それが認められないばかりに、命を落とした武人が星の数ほどいることを思えば、その割り切りは長所だといえなくもない。

その現実主義者から見て、天下をとった光武帝と、その麾下の十三将という、それこそ身の毛もよだつような猛者どもが、建国したのが後漢帝国なのだ。

交易品を巻き上げて、いい気になってる頭でっかちが、調子に乗って色気をちらつかせても、

「馬鹿なんじゃねえか」

えせ儒者の夢物語につきあう義理も、つもりもない。

「ま、いいや。漢もまだこっちにや手がまわらねえだろうしな」

このような場合、どう対処するかは人によって大きく分かれる。見ぬふりをする者と、みずごせない者とである。

あきらかに陳俊は前者だった、いや、

「んじゃ、ちよっくら点数でも稼ぎにいくか」

状況を利用して、むしろ利益を得ようと動くタイプだった。

* * * * *

罪人が拘留される牢屋は地下にあった。

石造りの廊下の壁面に横穴が掘られており、木の格子が取り付けられている。

夜半まで手厳しく尋問された劉嬰は、そのひとつに放り込まれていた。

小麦を固めて焼いたパンのようなものが差し入れられているが、それは勿論、水すらも手がつけられていない。

「しづとい奴」

見回りに来た番兵が、死んだように動かない劉嬰を見て呟いた。

顔は人相のわからない程に腫れ上がり、あばら骨も二、三本ほど折られたが、趙將軍による直々の取り調べにも、ついに彼は名前すら黙し通したのだった。

猛り狂う趙將軍は、本当に殺してしまいかねない勢いだったが、

「明日は　　ごうはいかん、ぞ　　よいな」

またしても先に息があがってしまい、憎々しげに吐き捨てるしかなかった。

どのくらいの時間がたっただろうか　　。

篝火もなく暗い通路に、足音を忍ばせた人影がひっそりと姿を現わした。

やがて門が静かに抜き取られ、微かな軋みを伴って、格子の一部分がゆっくりと開いた。

「劉嬰さん。　劉嬰さん　　」

横たわる彼に二度、三度と囁きかける声は、媛にものに間違いない。

さつきまでぴくりともしなかった劉嬰が、目覚めてむくりと起き上がった。

「あつ」

思わず悲鳴がもれたが、グロテスクに腫れ上がった顔を見れば、それも無理のないところだった。

「しいつ　　なんで、こんなところにいるんです」

囚人がたしなめるとは、あべこべである。

すっかりとした口調だったが、口中に違和感があったとみえて、口をもごもご動かして吐き出すと、それは根元から折られた奥歯だった。

「あ痛たた。すっかり絞られちゃいましたよ。ははは」

「酷い」

媛の声が震えていた。

「いや、それはさておき。いったい、どうやってこんなところに忍び込んだんです？」

その時、通路から押し殺した声がした。

「お早く」

耳にした劉嬰は、

「なるほど」

と呟いて立ち上がった。

「しかしですね、こんな危ないことしちや駄目じゃないですか。看守さんを買収だなんて、ばれたら大変なことですよ。でも」

劉嬰はでこぼこになった顔を歪め、歯を見せた。彼なりに微笑んだつもりのようなうだつた。

「お気持ちは有り難く。ご迷惑ばかりかけたのに、感謝の言葉もありません」

「そんな　それに、買収したわけじゃないんです」
「え？」

劉嬰はそこで口をつぐんだ。

油断なく周囲を見まわす看守の眼差しが、金に目がくらんだ者のものではないことに気づいたからだだった。

「駄目じゃないですか」

劉嬰はそう呟いたきり、言葉が出なかった。

十一 囚人が解放者を案じ、もののふが瞑想をやぶられること

媛と看守、ふたりはれつきとした同志だった。

おそらく太守の圧政に抵抗する地下組織、つまりレジスタンスの
ようなものだろう。

(危険ですね)

劉嬰は境遇を忘れ、不安を覚えていた。

圧政を敷くからには、敷けるだけの理由がある。

よほど用心してかからないと、市井の隅々にまで紛れている密偵
によって、すぐ網にかけられてしまうだろう。

なのに、この人のよいレジスタンスは、昨日や今日あつたばかり
の、どこの馬の骨ともつかない男を、危険を犯して助け出そうとし
ている。

74

(そんなのは、うっちゃっておけばいいんです)

時として、抵抗者は権力者以上に冷酷でなければならぬものだ。
こうした脱獄を企画できることじたい、それなりの組織が形成さ
れているとみてよいが、だからこそ一時の感情などに流されず、破
滅につながるような軽拳は謹むべきだろう。

(そう、だからこそ)

確かに、彼らのしていることは愚かだ。

(だからこそ、いやむしろ、なおのこと)

劉嬰はそんなことを、ぼんやり考えていた。

地下を抜けて、長い回廊に出た。

建物の一階にあたり、一定の間隔で灯籠が焚かれている。

劉嬰が、くんと鼻を鳴らして空気を嗅いだ。

「これはいい。ひと雨、来ますね」

「え？」

敦煌のある地方は、今でいう砂漠性気候で、夜は冷えるが雨は降らない。

「僕はね、もともと羊飼いでしたから」

不思議がるふたりに、劉嬰は説明した。

「僕は河北のもっと北、狄と呼ばれる民族が治める地で、山々を歩いて羊を追う牧童だったんです」

「そういえば、漢のご出身ではないということでしたね」

「ええ。でもね、おかげでちょっと得意なことがあるんです」

「それは、さっきの」

「そう。僕は空気の匂いで天候がわかります。太陽や星の動きで、自分がどこにいるのかもわかります。そこ、左ですよね」

驚いて振り返る看守に劉嬰は、

「何となくわかるんです。ほら、馬って道に迷いませんよね。犬は引越した飼い主を捜しあてます。それと同じようなもんです」

同じようなもの、と言われても。

因みにこれより約二千年後の一九九五年、ダートマス大学のトービー博士はラットの脳内に 方向細胞 なるものを発見したという。それによると、動物は体内器官によって方角を感知し、また移動を記憶して辿る能力があるそうだ。

また学説によれば、人間もその細胞をもっているという。ただ、きわめて少なく微弱なため、能力を発揮するのは稀とのことである。

「気味が悪いですか？でもこれ、遊牧の暮らしにはずいぶん役に立ちましたよ。人より動物に近いんですかね、はは」

こんな状況で劉嬰は饒舌だった。

「でもある日、僕は漢の都に連れていかれました。なんでも死んだ母の縁故だとか 詳しいことはわかりませんし、今となってはどうでもいい話なんです」

「いろいろあったって、麗華さんも仰ってました」

「彼女は 可哀想なひとなんです。実は商家じゃなく、符術を代々つかう名門の出身なんです」

符とは竹や木を薄く剥いだもので、まだ紙がないこの時代の人々は、それに文字を書き付けていた。

符を並べて繋いだものが簡であり、書簡になると一般的な手紙や書物につかわれることが多く、東洋で最初に書かれた史書「春秋」なども原本はこれである。

その「符」に呪文を書き付けて行う呪術を「符術」という。

当時は呪術であると同時に医療でもあり、また原始宗教の側面をもあわせもっていた。

現代に生きる我々は、それを以外なところで目にする機会がある。この符術が発展・体系化されたものが今日の道教であり、横浜の

中華街にある関帝廟などは道教の宗教施設にあたる。

また道教における僧侶を道士といい、これは香港や台湾などで製作され、日本でもブームとなったキョンシー映画でその姿を垣間見ることができる。

その作中で道士は、呪文を書いた紙を貼り付けて中国版のゾンビであるキョンシーを鎮めるが、古代の道士にあたる「符術つかい」は、さらに多様な分野で活躍したそうだ。

それは紀元前四世紀に成立した木・火・土・金・水を万物の元素とする体系学　すなわち五行説の影響を受け具現化させたものであったという。

劉嬰は続けた。

「代々、すぐれた符術者を出す家系でしたが、なかでも彼女の才能は並外れていたそうです。でも、それじゃ顔が立たないひともいます。おかげで彼女、みんなに疎まれ、とうとう厄介者だった僕のお嫁さんにされちゃったんですよ」

「でも、麗華さんは」

「最初は鼻にもひっかけてくれなかったんですけどね　今はなんとかやっています、ははは」

「弓林さんや方望さんは」

「どこいってもあんなもんです。ひどいんですよ、あのふたりは」

弓林や方望がきけば、口々に異議を唱えるところだろう。

「けど、あのふたりがいなければ、僕なんかとつくに死んでます。本当に凄いですよ、世が世なら大將軍と名宰相に」

その時、劉嬰の身体が、ふいに沈んでいった。

「！」

不意打ちの一撃を、首筋に見舞われたのだった。

「こんなこつたるうと思つたぜ」

灯笼の陰から、ゆらりと出てきたのは陳俊である。

脱獄囚と新手ふたりを網にかけ、嬉しさを隠そうともしていない。

「いけねえよ、勝手に逃げ出しちゃあ。まあ、わかっちゃいたけどな。こうまでダンマリ決め込む奴は、本当に何も知らねえか、仲間が助けに来ることになつてるかのどっちかだわな　　お？」

驚いたことに、気絶するはずの相手が、ふらつきながらも立ち上がろうとしている。

「おやおや、案外しぶといね。なるほど、あのおっさんが手を焼くわけだぜ」

言いながら剣を振りかぶった。

もちろん、今度は死なない程度の一撃を打ち込むつもりだろう。

腕を飛ばすか足を落とすか　　あとは、

「担いでいって一丁上がり。こいつらに泥を吐かせりゃ、張のおっさんもお役御免、いよいよ將軍の座が転がり込んでくるってこつた。思えば長い道程だったぜ。腕一本で西へ東へ、乱世をあちこち彷徨つたが、とつとつツキがまわってきやがった」

そんな皮算用に油断があつたのか、

「お逃げください！」

先導の看守が陳俊に組みついた。

「お、何だてめえ、やるか？」

「早く！」

「でも」

「誰も逃がすわけねえだろ、この馬鹿」

陳俊が剣の柄を振り下ろすと、看守は呻いてその場に崩れ落ちた。

「お前らにも聞きたいことがあんだからよ」

言いながら、立っているふたりを睨みつけて、

「あれ？」

暗がりの中、目をこらした。

媛があわてて顔をそむけたが、どうやら知った顔がそこにあると気づいた様子だった。

次の瞬間、その媛が決意を固めて劉嬰の手をとった。

「ごめんなさい！」

まだ意識が朦朧としているらしい劉嬰も、おぼつかない足取りながら走りだす。

陳俊は追わなかった。

足元にうづくまる看守に目もくれず、逃げたふたりが消えていった闇の一点を凝視して、そのまま身じろぎもしない。

やがてぼつぼつと、この地方にしては珍しい雨が降り始めたが、

陳俊はそのまま立ちつくすだけだった。汗か雨だれか、わからないものが首筋を流れ、

「あいつは」

しばらくして、ようやく口にしたのがそれだった。

* * * * *

ほどなくして、脱獄が発覚した。

「な、な、な」

跳ね起きた趙將軍は怒りのあまり、うまく舌がまわらなかったという。

「何をしておるかッ！」

雷もかくやという大喝が、直立不動で居並ぶ配下を硬直させた。

「捜せ！草の根わけても引っ捕らえるのだ！」

通路に倒れていた看守は、何度も水をかけら目を覚ましたものの、よほど強く頭を打ったとみえて、ただ一言、

「陳俊どのに やられました」

と言ったのみで、後はなかなか言葉が出てこないという。

「意識がはつきりするまでには、まず半日はかかるのかと」

「陳俊めにやられたと、そう言ったのだな？」

「はい。それだけはこの耳で、はっきり聞きましてございます」

「うぬ　　奴め、なんのつもりか」

この看守は媛の仲間であり、脱獄を手引きしたはずが、幸か不幸か意識が朦朧として証言できない為、違う受け取り方をされていたのだった。

「問いただしてくれる。事と次第によつては　　」

物騒な顔で立ちあがった趙將軍だったが、

「それが　　おりませぬ」

「何？」

「おらんです。陳俊の役宅はおるか、衛尉兵の駐屯地からも、配下の兵が消えておりまして」

「　　まことか」

將軍はぎりりと奥歯を噛んだ。

「読めたわ。奴は口先ばかりで諸国を渡る詐欺師の類、言葉巧みに太守どのに取り入って旨々と利を得たが、頃合いとみて時ならぬ雨に乗り、姿をくらましおつたのよ」

さして根拠のない推論だったが、結果的には当たっていないかもしれない。

「そつえば、思いあたることかございます」

と配下のひとりが、酒場での顛末を報告した。

「まさに小山のような大男でございまして、武芸はともかく腕の力じゃあ、とてもかなうものではございませぬ。あ、もちろん將軍は別ですが」

「ここでひとつ咳払いをして、

「とにかく、だらしく酔って油断したところを、懲らしめてやったのでございますが、思えばあれほどの巨軀、この敦煌の人間とも思えませぬし、ただの行商にも見えませんでした。もしかしたら、奴らの一味ではありませんでしょうか」

ところどころ都合よく誤魔化しているが、もちろん弓林のことだ。ほとんど毛が逆立ちそうな張將軍は、鬼の形相でこれを聞いていたが、やがて得心がいったとみえて、

「これで繋がった。まさしく、奴めらの一味に違いあるまい」

趙將軍は瞳をぎよろつかせ、

「奴めら、もはや城内にはおるまい。脱獄した男、露天をしておった女、我が邸から逃げおった男」

「ここで將軍も咳をひとついれて、

「さらに今、報告のあった大男、そして陳俊。こいつらは皆、一つ穴の狐であろう。今ごろは城外を逃げているだろうが、そうはさせん。早馬を八方に散らし、探索にあたらせよ。お見つかり次第、わしも追う」

途中から少しずつ間違つて、結論はかなりずれているが、こつう迷いのなさも武人の美德ではあつた。

「長矛の準備をしておけい」

おお と、どよめきが起こつた。

これこそ敦煌きつての武人がここその時に携える、とっておきの得物である。

大事な一戦にはこの長矛を傍らに、しばし瞑想にふけてから戦場に臨む將軍だつた。

気に食わない男だが、陳俊はそれなりに腕は立つとみている。

これも理由はなく、ただ武人としての勅に従い、

(配下のもものでは討ち取れまい)

そう踏んでいた。

だが。

「將軍！一味の女が、出頭して参りました！」

飛び込んできた配下の兵が、入ったばかりの瞑想を破つてしまつたのだつた。

十二 顔役に追放され、無頼があらわれること

ところ変わって。

夜も更けた、媛の旅籠である。

二階のひと部屋にムシロが敷かれ、横たえられた劉嬰には、顔も見えないほど薬草が貼られていた。

周囲をぐるりと仲間が囲む。

弓林が難しい顔で沈黙をやぶった。

「なあ、姫さん」

「なによ」

「えんか？これで」

「とりあえず、こうしとくしかないでしょ」

「いや、もつところ、符とか術とか　いろいろ、使たほうがえんとちゃう？」

麗華は唇を噛んだ。

「それ系、苦手なのよ」

「それ系で」

「なんか文句」

静かな怒気に、さすがの弓林もたじたじだった。

先ほどまでの麗華は、気の毒なほど取り乱していた。

不安にかられた感情のバランスは、些細なことで均衡を失う。

「まあまあ。何事にも得手、不得手がございますよ」

方望がとりなしたが、不得手と言われた麗華はいよいよ鬼神の形

相だ。

が、それも一瞬で、たちまち空気が抜けたように萎んでしまった。

「そうね　あたし、無力だ」

「その、なんや。そういう意味とちゃうて」

もちろん悪気があったわけではない。

一行の用心棒を自負していただけに、弓林も責任を感じているのだ。

事態がこうなると、拳を振るうしか特技のない弓林には、現状を好転させるすべがない。

水が運ばれてきた。

「ご加減は、いかがかな」

数名の若者を引き連れて、入ってきた老人が言った。

身なりは質素だが、ただの老人ではないことはひと目でわかる。

長い白髭だけでも、手入れに相当な手間をかけているはずだ。

それは財力を示し、すなわち有力者であることを示す。

その他、杖、袴の着物、靴、それらに素早く目を走らせた方望が、手を組んで礼をとった。

「ほつ」

老人は髭をさすった。

「話の早そうな御仁だ」

それなりの街になれば、政治的な統治者の他に、土地の住民を代表する顔役がいる。

かつての媛の父親がそうだった。
今の顔役は、目の前にいる老人らしい。

(とにかく、偉いお爺さんらしい)

麗華はともかく倣って頭を下げたが、弓林はふんと鼻を鳴らした
だけだった。

「で、大人。どのような御用向きで私どもに
「そのことよ」

老人は眉毛に隠れそうな目をしょぼつかせた。

「敦煌から、立ち去ってはもらえまいか」

単刀直入だった。

弓林があぐらをかいたまま、ぎよろりと目を剥いた。
麗華もなにか言いかけたが、方望がやんわりと制した。

「お尋ね者は、役人に突き出すのが本来では？」
「話そう」

あくまで話が早い。

「この敦煌は、いま曹延という太守に牛耳られておる。この男、儒
者あがりだな。商業、とりわけ交易を卑賤の行いとして禁じ、その
くせ自分は交易品を安く買い上げ、ひとり財を蓄えている」

老人は抑揚のない声で語り続けた。

「早くに手を打てばよかったが、そもそも商人は争いを好まず、つい後れをとった。気が付いた時には、財力を背景に武力も手にしておる始末よ。訴えようにも、漢朝廷はまだ内乱から立ち直っておらず、匈奴をはじめとする近隣の勢力も、貢物で懐柔されてはどうにもならん」

さすがというべきか、説明は要領を得て簡潔だった。

匈奴というのは古代中国の北にいた騎馬民族で、スキタイの流れを汲むとも、のちにヨーロッパを荒らしまわったフン族の祖先ともいわれている。

約百五十年前の武帝が討伐し、その影響もあってこの時期は東西に分裂していたが、それでも巧みに馬を乗りこなす彼らは、中華圏の人々にとって脅威であり続けた。

そんな騎馬民族の代表格が、のちにアジアからヨーロッパにかけて大暴れする蒙古である。

英雄チンギス・ハンに率いられた彼らは、中国はもとより中央アジア、中東、さらに東欧にまで駒を進めて、史上最大の大帝國をつくりあげてしまう。

蒙古もいきなり現れたわけではない。農耕民族にとって騎馬民族は、紀元前から悩みの種だったのだ。

「おわかりかな」

「それでも匈奴なら、味方につける手段もございましょう。宝物を受け取るより、太守にとってかわったほうが、得だと思わせればよいのです」

しかし、老人は首を振った。

「左様。だが、匈奴は統治をしない。踏み潰すだけだ」

「なるほど、遊牧民の彼らには、領土経営の概念はございません」
「匈奴にとつて漢人は、治めるものではなく搾取するものでしかない。つまるところ今と変わりなく、しかも一度そうなれば漢への帰朝も容易ではない。今は辛抱するしかないのだ」

理にはかなくなっていた。

「は。情けない奴らや」

弓林が嘆息した。

「これ、弓林どの」

「そやないか。要するに泣き寝入りと違うんか」

「ずけずけとした物言いだが、同じく勝ち気な麗華もこつそり頷いている。」

「どう思われようと、何を言われようとも、わしらは今、太守とこ
とを構えるわけにはいかん。そして、あんたがたはお尋ね者だ。や
がてここにも搜索の手が伸びよう。いてもらつては困るのだ」

ふん、と弓林がまた鼻を鳴らした。

麗華も唇を突き出している。

「嘘ですね」

方望が扇子を揺らした。

老人の背後で、若者たちが気色ばむ。

「嘘などは、つかん」

「説明になっっているようで、なっっておりません。それなら何故、さつさと私どもを役人に突き出さないんでしょう。そのほうがよほど、手っ取り早いのではございませんか」

「我々の事情だ。出て行ってくれ」

「ところで、その若い方。腕の生傷は最近のもですね。どうなさったんです」

素早く近寄った方望が、若者の手をとった。

「マメが潰れて、さぞ痛いでしょう。馴れない武器など握るからです。しかし生兵法の代償は、こんなものでは済みませんよ」

弓林が驚いて顔を上げた。

その目が大きく見開かれている。

「やる気やったんか」

「違っ」

老人が打ち消したが、方望は構わず先を続けた。

「相手は軍隊です。いいですか、訓練された兵を侮ってはいけません。そのうえ相手方には、先の戦乱で各地を転戦した武将までいるのです。おそらく戦にもなりますまい。それにしても、何故ですか」

弓林の疑問は、半ば自分に問いかけるようだった。

「何故、いまこの段階で決起などお考えになったのです。民衆が軍隊を相手にする戦術は唯ひとつ、地の利を活かした奇襲によるしかありませんが」

今風にいえば、ゲリラ戦だろう。

「ここ敦煌はあなた方の地元であると同時に、太守の本拠地でもある。城内に地の利があるとも思えず、さりとて城外は身を隠す木立もない荒野。となれば数を頼みにするしかありませんが、数的にもあなた方は太守の手勢とよくて互角、おそらく下回るのではありませんか」

「そんなこと、考えてはおらん」

「さらに。私どもの仲間が、こちらの旅籠の女将どのに救われております。それこそ下手に逃がして捕えられ、口でも割られようものなら一蓮托生、あなた方にも火の粉がかかるは明白です。ここは突き出すか、あくまで匿うかのいずれかしかないはずなのに、我々を逃がしてさらに決起するとは、どうもあべこべで解せません」

その時、劉嬰が跳ね起きた。

薬草がはらはらと舞い落ちる。

「あ」

麗華が駆け寄った。

「それです」

「え？」

「媛さんですよ」

「え？ え？」

「媛さんは、どこです？」

「そうか　しまった！」

叫んだのは方望だった。

「この、したり顔の痴れ者め。いったいどの口で、数が頼みと賢しくも道理を説くか！」

方望は自分を罵っているのだった。

「なんや。どないしたんや」

「媛どのですよ。今になって彼らが動かねばならない理由 何故、この場に彼女はいないんです。役人に捕えられたに違いありません」

「いや」

苦悩に満ちた表情で、劉嬰がそれを否定した。

「彼女は、出頭したんでしょう。顔を見られたから、皆に迷惑をかけるまいよう、ひとりで行ったんですよ。そうですね、ご老人」

方望は頭を抱えている。

まるで人が変わったように、愛用の扇子すら取り落として、いつもの飄々とした優男の面影がまるでなかった。

「すみません！」

劉嬰が身体を床に投げ出した。

「これ。顔をあげなさい」

「謝って済むことじゃないけど、本当にすみません。事情も知らない僕らがあちこちで騒ぎを起こして、危ないところを助けてまでもらったのに、こんなことになってしまつて」

ほとんど額を床にこすりつけんばかりだった。

あぐらをかいていた弓林も、背筋を伸ばして膝に手をつき、

「わしもや。悪かった。言葉も過ぎた。この通りや。堪忍してくれ」と、頭を下げれば、

「お詫びの言葉もございません」

すっかり青ざめた方望も、震える手を組んで深々と腰を折った。決まりが悪そうに手を揉み合わせていた麗華も、

「ごめんなさい」

老人は何も言わないが、背後に控える若者たちは、何やらひそひそと話し合っていた。

「そんなことをしても、どうもならん」

と諫めたのは、やはり役人に引き渡す相談だったのだろうか。

「すでに、あれは罪を犯したのだ」

「だからそれは、わしらのせいや」

「今さら、あんたがたを役人に引き渡しても、どうにもならんと言っておる」

老人は毅然として、

「だが、あれの父親には恩があつてな。おそらく無事にはすまんだろつが、媛だけは何としても」

悲壮な決意を口にした。

勝算は度外視で、とにかく捕まった媛を助け出そうというのだらう。

利に聡い商人たちに、ここまでの決心をさせたのは、よくよくのことだ。

それは媛の人柄かもしれないし、父親の徳かもしれない。

おそらくは、その双方だろう。

その時だった。

「いや、そいつは無理だ やめときな」

耳慣れない 地の底から湧いて胆に響くような、ある種の畏怖を感じずにはいられない声だった。

誰だ ? いや、それは言葉にならない。

ただただ、耳を疑った。

いまのは本当にこの男の声なのか？

一方の仲間達は、

「やだ。怒ってる」

と戸惑う麗華をはじめ、それぞれ互いの目を見かわしている。

「方望の言う通りさ。勝てないと知れた戦くらい、馬鹿なもんはないぜ」

立ち上がる劉嬰の、表情までが別人になっていた。

「出ちゃった」

と麗華が天を仰ぎ、弓林は嬉しそうに屈伸を始めた。

「まあ、なんや。これはこれで、面白いことになったやんけ」
「方望」
「は」

扇子を拾い上げた彼も、どうやら落ち着きを取り戻している。

「策だ」

「七通りございますが、媛どのの安否を考えますと

」

「今すぐかかって、朝までにカタをつける」

「お耳を」

敦煌の住民たちは、それらを呆然と見つめていた。

長年、世の中を見て来た顔役の老人ですら、あまりのことに一言も出ない。

「すまねえな」

先程とはまったく違う調子で、劉嬰はまた詫びた。

「けどよ、こいつは俺達が蒔いた種だ。自分でケツ拭くのがスジだろうさ。だから俺ら四人でいってくら。あと、間違っても手を出さねえって若い連中に約束させてくれ。理由は さっき言ったよな」

劉嬰は啞然としたままの若者たちを見回した。

「おさまらねえ気持ちはわかるが、ここはひとつ朝んなるまで待つててくん。あんまり偉そうなことが言えた義理じゃねえが、俺もちつとばかし頭にきてんのさ。太守の糞野郎 曹なんとか言っ

たっけな俺らが。必ず引きずり出して、落とし前つけてくるからよ

十三 射手が叱られ、弓林が逃げ出すこと

東の空が青みがかって、朝が近いことを告げていた。

漆黒のなかにあつた家家が、黒ずんだ影となつて浮かび上がり、屋根や柱もそろそろ本来の色を取り戻しつつある。

太守邸を護る門番は、そんな暁の往来に異様な人影を認めて目をこすつた。

まだ黒い影でしかないその男は、その巨軀もさることながら、それ以上に大きな巨木を担いでいたのだった。

男はまっすぐに門へと歩んで来る。

やがて表情がわかる程度の距離になったとき、そこに不気味な笑顔を見た門番は、好戦的な意志を隠そうともしない表情に恐怖を覚えた。

「だ、誰」

答えるかわりに、にっこり笑つた　　いうまでもなく、弓林である。

救援が駆けつけるよりも早く、彼は巨木を担ぎなおして、

「いこかいな」

その態勢のまま、日頃は四人がかりで開閉する頑丈な門へと突進したのだった。

「う　　わあああつ！」

ちょうど四人いた門番は、ただ悲鳴をあげただけだった。

凄まじい音とともに門は文字通り木っ端みじんに碎け散り、今ま

さに駆けつけようとしていた衛兵たちの目を丸くさせた。

弓林は二つに折れた大木を投げ捨てると、悠然と邸内に踏み込んで行く。

「お、おい、賊だ！止める、止める！」

押っ取り刀で駆けつけた衛兵は、数を頼みに小山のような巨漢に飛びかかって行く。

だが、そこが実戦を経験していない彼らの悲しさだった。古兵なら、すぐに勘を働かせて逃げ出したに違いない。

まさに桁違い。

弓林が相手の胴ほどもある腕を振り回すたび、二、三人ほどまとめて宙を舞う。

勇敢にも槍を突き出した者は、次の瞬間、遠巻きにできた輪の向こうまで飛ばされた。

数人で呼吸を合わせ、一度に突き出しても結果は変わらず、無造作に槍を掴まれた不幸なひとりは見上げるほど高く舞い上がり、三回転してから地上に戻ってきた。

「ゆ、弓だ！」

ところが、これも無駄だった。

空気を切り裂く音がするや、どの方向から放たれた矢でもわずかに身体を動かし躲してしまふ。

「ば、化け物だあつ」

もはや恐慌状態に陥った衛兵は狂ったように矢を放つが、どれもあてずっぽうで、わざわざよけるまでもない。

だが、そのうちの一本を、何を思ったか弓林は動物的な反射神経

で掴み取ると、

「こら、危ないやないか！」

怒声に射手がすくみあがる。

「ワシの後ろにお前の味方がおったやろ。当たったらどないするつもりや。射線に味方がおったら、間違っても弦を引いたらあかん。基本中の基本やないかい」

喧々と説教を始めた弓林だったが、ふと相手の顔を見て顔中に笑みが広がった。

「なんや お前やったんか」

それは先日、酒場で賭け相撲をした相手だった。

「あ うっう」

「あ、勘違いしたらあかんで。あれはもうええねん。お互い、酒も入っとつたし。まあ、ようあるこっちゃ」

言いながら大股に近づいていく。

「それより、うちの大将がえらい世話になつたらしいやんけ。そこ動くなや？礼がしたいねん。たつぷり、じっくり、礼したいねん」

そして頭上でポキポキと指を鳴らす
それだけで相手は失禁した。

「待てい！」

野太い大音声は、恐怖に震える兵たちには福音だった。鷹揚に弓林が振り向くと、目をいからせた趙將軍が、長矛を携え半身に構えている。

「ほう」

弓林が目を細めた。

「おるやないか、そこそこ面白そうなのが」

「貴様 自分のしたことがわかっておるうな」

「見ての通りや」

「もはや名は聞かぬ。たったいまその首、叩き落としてくれようぞ」

弓林は凄味のある笑顔を返した。

その瞬間からふたりの間に、余人の立ち入れない結界が張られた。あまりの緊張感に、周囲の衛兵たちは唾も飲み込めない。

じりと足半分、趙將軍が歩を詰めた 間合いの奪い合いから、駆け引きは始まっている。

方望はまだ構えもせず、悠然と手を腰に当てたままだ。

しかし小さなきっかけがひとつあれば、たちまち激しい攻防となるだろう。

身動きひとつとれない衛兵のひとり、冷たい汗を顎先から滴らせた。

「あ、せや」

不意に、弓林がぼんと手を打った。

「わし、用事があつたんや。ほな」

そして、さつさと踵を返して走り去っていく。
趙將軍は啞然とし、すぐに頭から湯気を立て、こめかみに青筋を走らせた。

「貴様ア！」

かつて味わったことのない愚弄だった。

ふんぞり返った太守の曹延も、鼻持ちならない陳俊も、誰もが趙將軍の武芸には一目を置いたのだ。

だが、白々しい嘘について立ち去る巨漢の顔には、まだ小馬鹿にしたような笑みが浮かんでいるばかりか、

「ついて来るなや。来たらあかんで」

などと、二度、三度振り返っては棒読みでそんなことを言う。

「よくも、よくも抜け抜けと！」

趙將軍は猛然と追いかけた。

その先をいく方望の、これまた人を馬鹿にした小走りも、烈火のような怒りに油を注いだ。

「待て！待たぬか！」

顔を見合わせた衛兵たちは、一瞬の自失から覚めると鬨の声をあげて將軍の背中を追った。

將軍の怒りが伝染した　　というより、極度の緊張と不意の解放によって、ある種の錯乱状態に陥ったのだらう。

先を争うように門からなだれ出て行く衛兵たちは、往来の隅でふ

らりと立ち上がり、散歩でもするかのよう^に門に向かう人影には、
まったく気付きもしなかった。

十四 詫びて礼を尽くし、アッパーカットでKOすること

「カンネーの戦いを応用いたしましょう」

弓林の「突入」より少し前、扇子を揺らしながら方望が言った。

「もつともカンネーの戦いは、平原でおこなわれた会戦でございますが、今回は城攻めに用います」

「時間、ないんやろ？みんなで正面からいったほうが早いんとちゃう？」

「お気持ちはわかりますが、力押しは案外と時間がかかるものなのでございますよ」

「ねえ、ところでカンネーって何？」

カンネーの戦いはこの時代を遡ること約二百年、ローマに攻め入ったカルタゴの名将ハンニバルが、5万の兵力で7万を「包囲」し壊滅させた一戦である。

「この場合に不可欠なのは前衛の働きです。ここは弓林どの、あなたにお願いしますよ」

「ん？ワシか？」

「右翼が大将どの、左翼が姫様。そして私は後衛　カンネーならさしずめ、カルタゴ歩兵といったところで」

「なあ、手短かに言ってくんな」

「この場合、前衛の役割とはつまり　」

* * * * *

「言ってるやろ。ほんまに用事があんねんで。ついてくるなや。来

たらあかんで」

趙將軍から逃げ回る弓林が立ち止まったのは、しばらく走り回った後だった。

「お前。人の話、聞けや」

趙將軍はもう返事もせず、走りこんだ勢いそのままに、振りかぶった長矛を脳天めがけて打ち下ろす。

やった。

息も切れ切れに追いついてきた衛兵たちはそう思った。

それほど完璧な一撃だったし、古参の兵は、実際にそうやって敵を屠る光景を、何度も目にしてきたのだ。

よもや外れるはずのない、必殺の一撃のはずだった。

「？」

だが、それでもまだ笑みを浮かべたままの弓林は、長矛が地面を打った後も平然と立っている。

打ち下ろされる瞬間、斜め後ろにステップしてかわしたのだ。

「なあ、見たか今の。地味やけど大事なとこや。横に逃げるだけじゃあかん。後ろに距離をとるだけでもあかん。両方や。剣先の軌道変える奴とか、途中で突きに入る奴とか結構おんねん。ほんまやで」

もう前後もわからないほど頭に血が上った趙將軍は、すぐさま次の一撃を放った。

これもかわした方望は少し距離をとり、すつと両腕を上げた。

深呼吸をして、顔つきが変わる。

見たこともない、奇妙な構えだった。

半身に構えて肩を揺らし、軽く握った右は顎の横、同じく左は目の高さ。

引きすぎない程度に顎を引き、肩幅に開いた両足は爪先立ちで、絶えず前後にステップを踏んでいるが、それでいて身体の軸は微塵もぶれない。

「本意やないけど、ひとかどの武人に無礼な態度をとって申し訳なかった。これも作戦や。こっからはもてる技を全部だして、礼を尽くして相手させてもらおうわ」

「？」

趙將軍は知る由もないが、これこそ今日という拳闘 すなわちボクシングである。

古代ギリシヤで発祥した拳闘は、この時代すでに八百年の伝統をもつ格闘技であった。

少なくとも紀元前七七六年には古代オリピックの正式種目となり、ローマ帝国が誇った巨大コロシウムで全盛期を迎えたのちに、西ローマ帝国滅亡によって一度その歴史を終えている。

こんにちのボクシングとは違い、その技法は荒削りというより原始的で、防御技術といえばブロッキングとスウェーバックをやる程度、ウィービングでもしようものなら達人クラスということになる。攻撃に関しては、振りかぶった腕を前方に繰り出すのみであり、ほとんどの試合は体格と体力で勝敗が決したという。

そこへいくと、弓林は革命児といえた。

惜しむらくは、その技術を後世に伝える機会がなく、またその気もなかったことだろう。

「なんの真似だ」

趙將軍が訝し気に観察していると、いきなり弓林が消えた。

歴戦で鍛えられた動態視力が辛うじて影を捉えるが、時すでに遅く懐に飛び込まれている。

こうなると長い柄が不利だった。

將軍は下がって距離をとろうとしたが、弓林はびたりとついて許さない。

低く構えた巨漢の上半体が、上下左右に激しくぶれた。

今でいうデンプシー・ロール(?) 趙將軍が培ったものふとしての本能が、

(危険)

と告げ、思わず柄を横に防御姿勢をつたが次の瞬間、その内側から突き上げる一撃に顎を持っていかれていた。

仰向けに一回転しそうになるところを踏みとどまると、すかさず続いて左右ほぼ同時の連打が襲う。

崩れ落ちそうになりながらも、ひと薙ぎ見舞う長矛をくぐってさらに一撃 今度こそ趙將軍は宙を舞った。

「ぐあっ」

「無駄や。しばらくは動けんやろ」

何をされたかすらわからず、とにかく立ち上がろうともがく將軍の上から、弓林の声が降ってきた。

「拳を突くにも距離がいるねん。おっさんの得物と射程が違っただけや。せやからあそこで離れようと思んて、むしろ前に行くべきやっと思っ」

その声は落ち着いて、あたかも一戦を論評するかのように、

「慰めやなく、際どい勝負やった。ワシは刃物振り回す相手と仰山やってきたけど、おっさんワシみたいな拳闘士は初めてやる。せやから今日の勝負は、あまりにもワシが有利やったんや。氣イ落としなや、次はわからんで」

十五 砂塵を巻き上げて逃げ、扇子を見逃すこと

夜が明け始めた敦煌の郊外。
オアシスの緑も尽きた荒野に、もうもうと砂塵を巻き上げて疾駆する騎馬の一団があつた。

敦煌衛尉の陳俊と彼の手勢、およそ三十騎。

しきりと鞭をいれ、暴徒侵入の急報を受け敦煌に急行しているわけではない。
して

その逆に、全速力で遠ざかっているのであつた。

「隊長オ」

警備兵とは名ばかりの、風体の悪いごろつきが陳俊を呼んだ。

「ねえ、隊長つてば」

その顔に馬用の鞭が飛んで、彼はあやうく落馬するところだつた。

「痛て、な、なにするつすか隊長オ！」

「その呼び方はやめろ！」

「え？だつて隊長がそう呼べつて わつとと」

二度目の鞭はあやうくかわした。

「ど、どうしたんすか、その 親分」

「どうもごうもねえよ」

「どうもごうもねえつて ねえ、いいんすか？敦煌にいかなくつても。誰か暴れてやがんでしょ。なんか方向、逆つすけど」

「いいんだよ、これで」

「あ、いいんすか」

血の巡りが悪いので、会話にいちいち時間がかかる。

「あのう　俺ら今、なにしてるんすかね」

「逃げてんだよ」

「え？」

「だから逃げてんだよ、馬鹿野郎」

「あ、逃げてんすか」

どうにもテンポが悪い。

「なんで？」

「俺あな、見ちまったんだよ。忘れたくても忘れらんねえ、あのいまましい糞餓鬼のツラをよ」

思い出したかのように、陳俊はぶるつと身体を震わせた。

「ずいぶん腫れてやがったが　確かにあいつだ。そこへ、あの

デカブツだろ。間違いねえ、奴らが来たんだ」

「へえ　奴らって、誰なんですか？」

「糞餓鬼とデカブツがいた。てことは小娘と優男も必ずいるわな

畜生、なんで今頃あいつらが出てくんだよ」

「へえ　どんな奴らなんですか？」

陳俊はしばらく黙っていたが、

「いいか。いま城内で暴れてる弓林というデカブツはな、大秦ローマの拳闘奴隷あがりつて話なんだが、あんまり強いんで買手手が奪い合った揚げ句、東へ、東へと流れるうちに成り上がって、最後は元帝ん

時に漢の將軍になったって奴だ。虎だの熊だのを締め上げたなんて噂がゴロゴロしてやがら」

と、説明をはじめた。

「んで方望つてキザな優男は、どうもサータワーアハナとかいう王朝の宦官あがりらしいが、帷幕の中から千里を見通すとかいう噂でよ、張子房の再来とか呼ばれてやがった。実際、鳥だか何だかをあつちこちに飛ばして何でも知つちまうし、あいつ自身も後ろに目がついてるみてえな薄ッ気味悪い野郎だよ。」

あと麗華つて小娘はな、符術だかまじないだかをやってる辛気臭え一族の娘なんだが、小せえ頃から空中に火イついたり、それを飛ばしてみたり　考えてもみな。年端もいかねえガキが仙人みたいな真似しちまうんだ。親もおつかながって、ていよく厄介者に妻合わせて追つ払つちまった。符術士というより、俺に言わせりゃ、あれは魔女だね」

「へえ　強そうつすねえ」

「そういうんじゃねえ。あいつらはな、そういうんじゃねえんだ。お前ら、昆陽の戦いつて知ってるか？」

「昆陽の戦いッすか？そうですなえ　知らないつす」

「だから馬鹿なんだよてめえらは。いいか、昆陽城に立て籠もる劉秀軍を、百万の王莽軍が囲んだ天下分け目の大いくさだよ」

その戦いで大逆転負けを喫した王莽の新王朝は、見る間に衰え、その年のうちに滅亡してしまう。

一方、勝利をおさめた劉秀はその後、河北地方を転戦して勢力を伸ばし、二年後に即位して漢王朝を再興した　と、史書にはある。

「実はな。そんな時、王莽軍を蹴散らしたっての、あいつらなんだ」

「へえ。その人たち、軍を率いてたんですか」
「違う」

手綱を握る陳俊の手が震えはじめていた。

「あいつら四人だけだ」

「え？」

「嘘じゃねえ。尾緒のついた噂でもねえ。俺はそんな時、従軍してたんだ。この目で見た。百万が四人に蹴散らされる“戦争”を、俺はこの目で見たんだ」

「そんな、まさかあ」

信じないのも無理はない。

しかし凍りついたような陳俊の表情が、その時の恐怖を雄弁に物語っていた。

「で、その 劉嬰つてのは」

「物ごころついた時分は羊飼いをしていたらしいが、俺が初めて会った頃は、麗華の後ろで震えてるだけのチビだったよ。だが、いつからか得体の知れねえ感じがするようになって 理由なんかわかんねえ。他の三人を束にしたよりもっと強えんだが、それだけじゃねえんだ、あいつは。とにかく、おっかねえ。ツラも見たくもねえくらいな」

「それじゃ」

「ああ。儒者がぶれの曹延なんざ、ひとたまりもねえさ。朝までには終わっちゃうわ。だから今、俺あこうして逃げてんだよ」

このあたりの引き際のよさ、義理にも地位にも執着しない「軽さ」を武器に陳俊は生き延びてきたといえる。

しかも、転んでもただでは起きない抜け目のなさも持ち合わせて

いた。

今、彼が向かっているのは敦煌郊外にある岩山の岩窟である。

商人たちから買い叩き、場合によっては力づくで巻き上げた物品を、太守曹延にそのまま献上するほど、陳俊は正直な男ではない。

ばれない程度に、かつ決して少なくない量を、横領して隠しておいたのだった。

「何があるか、わかんねえからな」

常にこうして保険をかけているからこそ、身の軽さでもあった。

道徳心は薬にしたくてもないが、それなりに頭は切れるのだ。

しかし、さすがの陳俊も、一団の最後尾で馬を駆る男が、帯に不釣り合いなほど大きな扇子を手挟んでいることにまでは、気付かなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5080r/>

キャラバン無頼

2011年10月8日14時54分発行